

高村光太郎『道程』を読む（六）

飛 高 隆 夫

師走十日

師走十日の日盛りを惜しげもなく
黒い幕にて物好きな夜よるをつくり
アウル館の舞台には
北八弥次郎兵衛息せき切つて
悲しくも馬鹿のありたけを尽すなる――

ちらちらとちらつくフィルムは
はがね鋼のいろにて

その色無頼漢より送られしをかき脅迫状の色なり
咽喉を痛めたる弁士の声に石川バアの鏡は照り返し
わがころ寒さにおびえて
中売の密豆マメに虎疫菌をまざまざと見つむ

出語り新内の黒きシルウエツトは
ロダンのカレエ市民の群像をつくり
中にも一人は頓狂声をふりしぼり
「こんなところに長居はおそれ」と

高村光太郎『道程』を読む（六）

まじめくさつた節まはし

つつましげ氣に立つ烟草の烟も闇ぐらに籠ればいちぢろく

ポマアドの匂さへ其処等あたりに囁けば

かすかに弁天山の鐘もひびき

「二三三四、二三三四、二三三四」と

千束町の小学校にやあらむ

疲れたる最終時間の課業の声も我がころを泣かしむ

亡者になりし弥次郎兵衛は

三角の紙を額に貼り

何処いづかしらぬ国道のまつただ中にて

恥を弁へぬ身振りに余念なく

時折は撮影者の注意のままに

はだけたる着物の前をも合せ

又でんぐり返しなどもうつなり

かかる間にわが友は我が家をおとづれて

わが外出に失望の眉を寄するなり

かかる間に元老の自働車は走せ

又春着のやりくりはつき

雑誌経営者は寄稿者に催促状を送るなり

アウル館の舞台には

北八弥次郎兵衛息せき切つて

馬鹿のありたけを尽し

師走十日の日盛りを惜しげもなく

我は青みて弁士の説明に耳を傾くるなり

(十二月十一日)

「詩歌」大正二年一月号に発表。「師走十日」は、十二月十日。

第一連は、映画館の中のようなすを表現している。「黒い幕にて物好きな夜を作り」は、扉を閉ざした上に、さらに、人の出入りの際に外の光が入り込まないように、黒い幕を垂れ下げたようすである。「物好きな」という表現には、昼間からそのような場所に潜り込んでいる自分に対する否定的な感情も込められている。「アウル館」は、浅草六区一号地にあった映画館。浅草公園活動写真株式会社によって新築、大正元年十一月二十九日に開館した。第一回番組は、新派悲劇「男一疋」四十八場、新派喜劇「大笑」十一場、史劇「ジークフリード」、西洋滑稽「はね子の頓智」、余興実演喜劇「うそくらべ」(柴田勝「東京の活動写真(映画)常設館の変遷(四)」)、「季刊映画資料」第十一集所載)であった。「北八弥次郎兵衛」は十返舎一九作の滑稽本「東海道中膝栗毛」の主人公。「膝栗毛」は弥次郎兵衛と喜多八が、いたる所で失敗や滑稽を演じながら、東海道、京、大阪を旅する道中記。「弥次郎兵衛」は初出では「弥治郎兵衛」。十二月十日という光太郎は開場後十二日目に訪れたわけだが、「東海道中膝栗毛」に該当する番組が、右に記した第一回上映分の中に見当たらないので、光太郎が見たのは第二回番組か。なお、北川太一氏の解題に、「梟の名を持つアウル館は、大正元年十一月二十九日に開場した映画館で、大正二年

十月にキリン館と改称、のち観音劇場になった。映画会社吉沢商會が旧派俳優を使って作った映画の中に「弥次郎兵衛喜多八」がある」とある。「北八弥次郎兵衛」が、「悲しくも馬鹿のありたけを尽す」という表現にも、先程の「物好きな」という表現と同様に、自分の姿を顧みる思いが込められている。

第二連。「ちらちらとちらつくフィルム」は、当時の資材、技術の拙劣さによるものであろう。「鋼の色」「その色無頼漢より送られしをかき脅迫状の色」の、無頼漢(ならずもの)より脅迫状(初出では「強迫状」)を送られたという事実については、未詳。「をかしき」は、見当はずれの、の意であろう。もし事実とすれば、智恵子との交際に関わってのものか。あるいは、智恵子を知る以前の、放蕩無頼の生活をしていた当時のものか。いずれにせよ、ここで見過ごすわけにいかないのが、「鋼の色」である。『道程』に「鋼」「鋼鉄」は、この時を含めて三例あるが、他の二つは、次のとおりである。

そは鋼鉄の暗き叫びにして

又西の国にて見たる「ハムレット」の亡霊の声か(「父の顔」)

かたい鋼の冬の空に

今日も亦黄道光がひかる

きいろい、あをい、無数の歯が笑つてゐる(「戦闘」)

見るとおり、三例とも負のイメージである。特に「戦闘」は、「師走十日」の三日後に作られ、共に、脅迫のイメージを含んでいるところは注目に値する。

「咽喉を痛めたる弁士の声に石川バアの鏡は照り返し」は、意味の取りにくい一行である。「照り返し」は、初出では「照りかへし」。「石川バア」の位置が不明である。弁士はしゃべり過ぎて咽喉を痛めてをり、石川バアの扉の飾りとして取り付けられた鏡に反射した光が、何かの都合で場内に差し込んでくる、という情景であろうか。いずれにせよ、光太郎の精神の不安定を示唆する雰囲気がある。「弁士」は「活弁」(活動写真弁士の略)ともいう。無声映画(サイレント映画)

時代、映画を上演する時、舞台の袖で、画面に合わせて、せりふをいったり、説明をする人（『マイペディア』による）。「寒さにおびえて」は寒いのを怯えて、の意であろう。「おびえて」は次行の「見つむ」に係っている。「中売」（初出では「中売り）」は、芝居や映画や、その他の興行物の場内で、御茶や弁当、菓子などを売り歩くこと、また、その人。「密豆」は正しくは「蜜豆」。初出では「みつ豆」。「中売の密豆に虎疫菌をまぎまぎと見つむ」は、「わがこころ」は、この寒いの、だから心配はないはずなのに、中売の蜜豆に、そこに存在するはずのないコレラ菌を、ありありと見てしまふ、というのである。この第二連は、強迫観念に振り回されているようすが、繰り返し、語られている。

第三連。「出語り新内」の「出語り」は、歌舞伎で、浄瑠璃太夫と三味線弾きが、舞台に設けられた席に出て、姿を観衆に見せて、語り、演奏すること。ここでは、新内語りが、弁士の手助けとして、あるいは、弁士そのものとして、出語りをしているのである。新内節は、浄瑠璃の流派の一つで、心中道行物を主とし、人情の機微を語る、というが、ここは滑稽物なので、後出のように、「頓狂声をふりしほり」ということにもなるのである。「シルウエット」silhouetteは、初出では「シルホエット」。フランス語で、影絵のこと。「シルウエット」が、「ロダンのカレエ市民の群像をつくる」というのは、出語りの黒い影が、ロダンの彫刻「カレエの市民」（一八九五年作）のように見える、というのである。光太郎の『ロダン』（アルス美術叢書24、昭和二年四月刊。全集では『オオギユスト ロダン』。北川太一氏の解題に、「書名は『ロダン』だが、中扉には「オオギユスト ロダン」と印刷され、」とあり、全集に収めるに際して、『オオギユスト ロダン』を採用した理由を説明している）の中で、光太郎は、「カレエの市民」について、次のように書いている。少し長くなるが、引用しておきたい。

彼が「地獄の門」の諸彫刻に熱中してゐる間にフランスの一閑

門カレエ市に十四世紀に於ける市の恩人ユスタアシユドサンピエルの記念像を建てる議が起つた。其話をカレエ市在住の一人友から聞かされ、いろいろの曲折のあつた後、雛型を提出して、結局依頼されることになつた。（中略）十四世紀の中葉、カレエ市を包圍した英国王エドワード三世が市の頑強な抵抗に腹を立てて、市を破壊しようとした時、残酷な条件通り身を犠牲にする事を決心して市民を救つた当年の義民の伝を年代記で読んだロダンはひどく其主題に打たれた。犠牲に立つた者は一人でなくして六人であつた。ロダンは一人の銅像の制作費で六人を作る事を申出で、十年かかつて「カレエの市民」を完成した。

「中にも一人は頓狂声をふりしほり」は、『道程』では、次行との間に一行のアキがあるが、改ページのための印刷の誤りと見て、ここでは、初出の形に従つた。「頓狂声」は調子はずれの大声。「こんなところ」に長居はおそれ」は、慣用句で、ひとつ所に長くいると禍を招き、ろくなことはない、ということ。特に、この句を耳がとらえたのは、光太郎の、無為に時間を浪費していることへの反省からであろう。

「節まわし」は初出では「節廻し」。

第四連。「つつまし気」は初出では「つつましげ」。「烟」は「烟り」、「籠ればいちぢるく」は「こもればいちぢるく」。「いちぢるく」（いちぢしろく）は「いちぢるく」（いちぢしろく）の古形。はっきりとわかる、の意。また、「匂」は「匂ひ」、「其処等」はルビなし、「囁けば」は「ささやけば」。「囁けば」は、ポマードの匂いがかすかに漂うことを擬人法でいったものだが、匂いが擬人化されるのは、おおよそ、光太郎の精神状態が不安定な時である。この二行は、光太郎が、眼前の映画に没入できずにいることを示している。そして、そのような状態にあるから、耳は、「弁天山」の鐘の音や、小学校の「最終時間の課業の声」を聞きとめるのである。「一二三四、一二三四、三三四」は、徒手体操の掛け声。「千束町」は浅草観音の北に広がる地域の地名。吉原遊郭は千束四丁目にあった。小学校の最終課業の声が、「我がこ

ころを泣かしむ」るのは、強迫観念にとらわれ、映画館の闇にひそむ自分と、小学校生徒の純真さの対比から生まれる心情である。

第五連は、初出では第六連と合わせて、一連仕立て。初出では、「しらぬ」は「知らぬ」、「時折」は「時折り」、「うつなり」は「打つなり」。「三角の紙を額に貼」るのは死装束の一つ。この連は、映画の内容を具体的にいつているわけであるが、第一連の「馬鹿のありたけを尽す」のを「悲しくも」と見た、その思いが続いており、映画に没入する気分ではないことが明らかである。

第六連は、自分が無為に闇の中にひそんでいる間の、世の中の動きを想像したもの。「かかる間にわが友は……」以下の二行は、こうしている間にも、自分は友情を裏切っているのではないか、という想像である。「元老」は、旧憲法時代（明治後期から昭和前期）、日本政界の最上層にあって天皇を補佐し、政変の際の後継首相候補者の推薦など、重要政務の決定に参与した政治家（『マイペディア』による）をいう。明治維新に大きな勲功があった薩長藩閥政治の長老がほとんどで、伊藤博文、黒田清隆、山県有朋、松方正義、井上馨、西郷従道、大山巖、桂太郎、西園寺公望の九人。「元老の自働車」が走るの、政界が混乱しているからで、ここは、いわゆる、大正政変を差す。大正政変は、大正と改元直後の大正元年末、および大正二年二月と二度あって、現在は主として二度目の政変をいうが、ここでは、大正元年末のものが該当する。西園寺公望内閣が二個師団増設問題で陸軍と衝突、陸軍大臣が辞職したあと、後任を得ることができず、内閣は十二月二十一日に総辞職した。この詩は十二月十日の出来事を書いたものであるから、政変も大詰めにかけてを、光太郎とて、無関心ではいられなかったであろう。「春着のやりくりはつき」（初出では「つき」は「立ち」）は、そのような世情の混乱とは関わりのない、庶民階級の年末のあわただしさを思いついたものである。「春着」はお正月用の新しい衣服で、これをととのえる、というのは、庶民階級にとっては大切なことであった。「雑誌経営者は寄稿者に催促状を送るなり」

は、友情とは別に、もう一つ、光太郎の生活に、直接、関わる想像である。

第七連は、まとめである。「青みて」は青ざめて。

以上のように、この詩は、忙しい年末の一日を、強迫観念にとらえられて、暗い映画館にひそんでいる、自分の姿をうたったものである。何が、光太郎を苦しめているのか。それは、おそらく、第四連に描かれた、「小学校」の「疲れたる最終時間の課業の声」に涙する光太郎の姿に見るべきものであろう。光太郎は、すでに、智恵子の愛と心を得たという自信のもとに、「郊外の人に」（十一月二十五日）、「冬の朝のめざめ」（十一月三十日）という愛の頌歌を歌いあげている。「師走十日」は、その十日後の作である。「をかしき脅迫状」が関係しているであろうか。脅迫状を「をかしき」、つまり、見当はずれといっている以上、それはないであろう。「智恵子の半生」の中に、「私は自分の中にある不純の分子や溷濁の残留物を知つてゐるので時々自信を失ひかけると、彼女はいつでも私の中にあるものを清らかな光に照らして見せてくれた」という一節がある。智恵子が「をさな兒のまこと」の体現者であれば、その前にある光太郎は、自分の不純を強く意識せざるを得ない。「自信を失」うのは当然である。ここに、智恵子に対する光太郎の愛の一途さを見ることができるのである。

戦 闘

宵の月が西に落ちると

薄明の地平線を被せる様に

かたい鋼はがねの冬の空に

今日も亦黄道光がひかる

きいろい、あをい、無数の歯が笑つてゐる

私の居る高い建築のテラスの上に

深い沈黙が襲ひかかる

不安をつつむ私の心は
竜胆丁幾ハグラム、コロロホルム精二グラムと声を出して繰り返してゐた

すると、いきなり

戦闘は突発した

すべての調和は破れた

分子は還元せられた

私の眼界は狭くなり、私の孤独は底の底に突き進み

無関心で過ぎた多くの隣人にも

情性のままに来た多くの友情にも

敵は到る処にころがつてゐた

さうだ、敵だ

すべて敵だ、偶然の味方も亦敵だ

私を信ずるものの外は皆敵だ

私を量るもの、私を窺ふもの、私を試みるもの、私を疑ふもの、

私を評価するもの

是等は皆私の敵だ

其の上私を知らぬもの、私と関係なきものも亦敵だ

敵、敵、敵

すべてを切り離して、私は今戦闘を始めるのだ

窄き門より入れよと鋭い声が聞えて来る

しかし私は何だ

私は私自身との戦闘にまづ尽さねばならぬ

私はまだ一つの雰霧星の形に過ない

多くの不純を含み、無駄を有し、稀薄を交へてゐる

私は突進せねばならぬ

そしてエエテルの軋轢によつて緊縮の度を高めなければならぬ

又アミイバの精力を以て

私でない私を私の体から排除しなければならぬ
一噸のピッチブレンドを破壊して耳かき程度のラヂウムを得なければならぬ

常に蟬蛻し、常に更新しなければならぬ

戦闘の開始はまづ頑迷な私の破壊である

敵、敵、敵

敵は私の肉身に喰ひ入つてゐる味方の中にもあつた

私はさう思つて五体をふるはし

階段を飛び下りて街に出た

自働車の臭い瓦斯が私を一層苛たした

静まり返つた十二月の夜の空は

私を抑へつけようとする

しかし、私は直ぐに其の静けさの裏面を感じた

そして歩き廻つた

私の肉身に喰ひ入つてゐる味方の中にも敵が居ると同時に

最も烈しい当面の敵の中にも私の姿を見ることがある

当然私のものであるべきものをみる事がある

私は其を取らねばならぬ

敵の中に含まれた私の一部分！

私は其をもぎ取らないでは居られない

敵、敵、敵

私は戦闘の為に五体をふるはし

氷つた空気をつき破りながら耳に聞いた

たとへやうのない喜びの声と

魂にこたへる悲しい叫びとを

「文章世界」大正二年一月号に発表。初出には「——水野葉舟氏に寄す——」の献辞がある。水野葉舟（明治十六年—昭和二十二年）は、歌人、詩人、随筆家、小説家。初期には蝶郎と号した。東京新詩社で光太郎と知り合い、生涯の親友となった。葉舟は、明治三十九年刊行の文集『あららぎ』に「吾が第一の集を遙かにニューヨークにある高村光太郎君に寄す」と献辞を記し、光太郎は大正四年、葉舟の小品選集『草と人』を編集し、序文を記し、巻頭に葉舟の肖像画を掲げた。この詩は、光太郎、智恵子の間を心配する葉舟に、光太郎が自己改革の決意を述べたものであろう。「文章世界」の編集後記にあたる「記者通信」に、「高村光太郎氏は、論ずるよりもやはり、と言はれて、得意の詩篇を寄せられた。氏の芸術論は、他日を期して寄稿を乞ふことにする」とある。初出では、繰り返し記号が多く使われており、また、初出と詩集の間には、仮名と漢字の書き換えがあるが、一々は注しない。また、第二十一行は「私を試みるもの」の下に読点があり、それに従った。

先にも触れたように、「師走十日」の三日後の作である。「師走十日」では、「自分の中にある不純の分子や濁濁の残留物」を意識して、意気消沈していた光太郎であるが、この詩では、気持ちを立て直して、自己を夾雑物のない純粋な存在として確立しようと、それらとの「戦闘」を始めようとしているのである。

第一連、「かたい鋼の冬の空」は、冬の硬質な感じをいったものであるが、「鋼」は、「師走十日」の項で述べたように、当時の光太郎にとって、脅迫のイメージと関わりがある。「かたい」は初出では「堅い」。「黄道光」は、日没後、薄明が消え失せたのち、西天の地平線近くから、また日の出前、東天の地平線近くから、いずれも、太陽の視軌道に沿って見える、淡い光の帯。その「黄道光」が「きいらい、あをい、無数の菌が笑つてゐる」ように見えるのは、光太郎の強迫観念から生まれた、不気味な幻想的なイメージである。光太郎が、「高い建築のテラスの上に」いるのは、孤独を求めていることであろう。自

分を一人に切り離して、自分の内面を凝視しようとしているのである。「テラス」は建物の街路や庭園に張り出した部分。初出では「テラス」。「不安をつつむ」は、不安を隠している、秘めている、の意。「竜胆丁幾八グラム、コロロホルム精二グラム」は、意味不詳。おそらく、光太郎にとっても意味不明のまま、ふと、浮かんだことばを、無意味に繰り返していたのであろう。「竜胆丁幾」は、ヨードのアルコール溶液。赤褐色で特有の臭気があり、皮膚の殺菌や刺激剤として用いる。「コロロホルム」はコロロホルム。アルコールに水と晒粉とをませ、蒸溜して得られる無色揮発性の液体。窒息性の臭気があり、麻酔作用がある。「すると、いきなり」は、初出では「するといきなり」。「戦闘は突発した」は、後に続く詩句から見、外部のすべてに「敵」の存在を感じる状態に陥ったことの表現である。「分子は還元せられた」は、分子はそれを構成する原子に還元せられた、ということ。すべてが、もとのもとに還元され、そこから、すべてが新たに再構築される、という構図である。「私の眼界は狭くなり、私の孤独は底の底に突き進み」は、精神が急激に自己の内面に集中し、その結果、自己の孤独を痛感するようすの表現。「眼界」は視野。そのような、絶対的な孤独に身を置いてみると、「敵」が「到る処」に存在していたことが、ありありと見えてくるのである。ここでは、「敵」は、自分を取り巻くもののうち、「私を信ずる物の外は皆敵だ」と定義される。「無関心で過ぎた多くの隣人」「惰性のままに来た多くの友情」「偶然の味方」「私を量るもの、私を窺ふもの、私を試みるもの、私を疑ふもの、私を評価するもの」「私を知らぬもの、私と関係なきもの」、これらが、まず、「敵」として切り離される。初出では、「窺ふ」は「窮ふ」と誤植。また、「評価」するは、『広辞苑』第五版によると、意味の2として、「善悪・美醜・優劣などの価値を判定定めること。特に、高く価値を定めること。」とあるが、ここでは、前者の意味である。私の価値を見定めようとすることで、私を信じていないことになる。「窄き門より入れよ」は、『新約聖書』マタイ伝第七章第十三節「窄き

門より入れ、滅にいたる門は大きく、その道は広く、之より入る者おほし」第十四節「生命にいたる門は狭く、その路は細く、之を見出すもの少なし」による。「鋭い声が聞えて来る」とあるが、もちろん、光太郎の内面の声である。「生」にいたる道を自分は歩むのだ、という決意が生んだものである。ここに、「道」という觀念が姿を見せていることに注目しておきたい。ここまでが、外部の「敵」を追及したのに対して、以下、内面の検討に移る。

第二連。初出では、第二十七行「しかし私は何だ」の前に一行のアキがある。『道程』ではここで改ページになるので、印刷の誤りと見て、初出に従う。「私はまだ一つの霧霧星の形に過ない」「過ない」は初出では「過ぎない」の「霧霧星」は、密度が低く、温度も低い原始星をいうか。星は、ガスや塵が衝突などをきっかけに収縮し、収縮、衝突を繰り返してうまれる。詩句の意味は、次行の「多くの不純を含み、無駄を有し、稀薄を交へてゐる」に同じ。「エエテル」ether（オランダ）は、光の波動説で光の伝播を媒介する媒質として仮定され、後、一般に電磁場の媒質とされたもの。しかし、相対性理論によってその存在は否定された。もちろん、ここでは、その存在は肯定されている。「軋轢」は本来は車輪のきしりの意であるが、初出では、「エエテルの軋轢」は「エエテルとの軋轢」であったので、それが正しいとすれば、ここでは、衝突というほどの意か。「緊縮の度を高め」るというのは、「霧霧星の形」を星にすることであるが、ここでは、自己の内面の「緊縮の度を高め」ることである。「アミイバ」は、もとギリシア語で変化の意。単細胞の原生動物で、大形のものでも、直径約〇・二ミリメートル。分裂、胞子形成によって増殖する。「アミイバの精力」は原初的なエネルギーの意か。「排除しなければならぬ」は、初出では「排除しなければならぬ」。「一噸のピッチブレンドを破壊して耳かき程のラヂウムを得なければならぬ」は、自己の純粋な本質を把握しなければならない、という程の意。「ラヂウム」は放射性元素の一。ウランなどととも「ピッチブレンド」（ウラン、ラ

ジウムの原料鉱石である閃ウラン鉱のうち、特に塊状で結晶度のひくいもの）中に存在する。「蟬蛻」は「蟬蛻」と同じく、蟬の抜け殻のことであるが、ここでは、蟬が殻から抜け出すように、脱皮し、成長すること。「戦闘」が「突発」した時、「すべての調和は破れ」、「分子は還元せられた」ように、「私自身との戦闘」においても、「戦闘の開始はまづ頑迷な私の破壊」から、はじめなければならないのである。なぜなら、「敵は私の肉身に喰ひ入つてゐる味方の中にも」存在しているからである。この場合の「敵」は、「私自身」の中の不純、無駄、稀薄であり、真の私自身であるために、排除し、緊縮されなければならないものである。

第三連。「さう思つて」の内容は、「戦闘の開始はまづ頑迷な私の破壊である」を指す。『道程』では、「階段を飛び下りて街上に出た」と次行との間に一行のアキがあるが、改ページのための印刷の誤りと見て、初出に従った。「静まり返つた十二月の冬の空」が「私を抑へつけようとす」というのは、「かたい鋼の冬の空」に感じる抑圧感か。「其の静けさの裏面」に存在するのは「敵」と内通するものか。「私」が「歩き廻」るのは、「静けさの裏面」に存在するものに同一化されないためであろう。

第四連。「私」の神経は研ぎ澄まされ、「私の肉身に喰ひ入つてゐる味方の中にも敵」を見るばかりでなく、「最も烈しい当面の敵の中にも私の姿を」見ることになる。「私は其をもぎ取らないでは居られない」のは、当然である。

第五連。「たとへやうのない喜びの声」は、「敵の中に」いる「私」が、それを認められたためにあげる歓喜の声。「魂にこたへる悲しい叫び」は、「私の体」から排除された「私でない私」のあげる悲痛な叫び。

「郊外の人に」「冬の朝のめざめ」において、力に満ち溢れ、高らかに愛の頌歌をうたいあげた光太郎。その僅か十一日後の、「師走十日」における自分の不純さに対する強迫觀念に怯える光太郎。そして、そ

の三日後の、自分の中の不純さを直視し、克服しようとする光太郎。その落差は大きい、そこに、光太郎の智恵子への愛に対する誠実さを窺うことができるのである。

一九一三年

人に

遊びぢやない

暇つぶしぢやない

あなたが私に会ひに来る

——画もかかず、本も読まず、仕事もせず——

そして二日でも、三日でも

笑ひ、戯れ、飛びはね、又抱き

さんざ時間をちぢめ

数日を一瞬に果す

ああ、けれども

それは遊びぢやない

暇つぶしぢやない

充ちあふれた我等の余儀ない命である

生である

力である

浪費に過ぎ過多に走るものの様に見える

八月の自然の豊富さを

あの山の奥に花さき朽ちる草草や

声を発する日の光や

無限に動く雲のむれや

ありあまる雷霆や

雨や水や

緑や赤や青や黄や

世界にふき出る勢力を

無駄つかひと何うして言へよう

あなたは私に躍り

私はあなたにうたひ

刻刻の生を一ぱいに歩むのだ

本を抛つ刹那の私と

本を開く刹那の私と

私の量は同じだ

空疎な精励と

空疎な遊情とを

私に關して連想してはいけない

愛する心のはちぎれた時

あなたは私に会ひに来る

すべてを棄て、すべてをのり超え

すべてをふみにじり

又嬉嬉として

(二月十八日)

「新文林」大正二年三月号に発表。

「遊びぢやない／暇つぶしぢやない」の二行について、伊藤信吉氏は、『鑑賞智恵子抄』において、次のように鑑賞している。

ごまかしや遊びでない恋愛には、どんな場合にも、生と生命の原質というべきものが内包されている。人間の本来としての生の燃焼であることによって、さえぎるもののないいちぢさで生命の炎が立ちのぼる。「充ちあふれた我等の余儀ない生命である／生である／力である」という言葉は、恋愛を生命的なものとして自

覚するところに発している。二つの生命が燃えることの必然。それゆえそれが「遊びぢやない／暇つぶしぢやない」という、叫びに似た言葉になった。この二語は自己弁護のようにもとれるけれども、作者は何よりも生命の燃えの必然性を言ったのである。

初めから長い引用となったが、すぐれた鑑賞である。第四行「画もかかず、本も読まず、仕事もせず」の上下の「――」は、初出にはなかった。「さんざ」は「さんざん」の略。甚だしく、したい放題に、の意。「数日を一瞬に果す」は、数日間が一瞬間と思われるような、充実した時間を過ごすこと。伊藤氏は、「このときいっさいは生命そのものとして在る。いっさいが生命に還元し、いっさいが生命的なものに化す。(中略)このように時間もまた生命に化す」と、鑑賞している。「充ちあふれた我等の余儀ない命である」は、愛に充実した二人の命の必然の行動である、の意。「余儀ない」は、他に充実すべき方法がない、やむを得ない、の意。「命である」は、生命力の発現である。生命力の姿である、の意。「生である／力である」には、「生」＝「力」という認識が示されている。

「浪費に過ぎ過多に走るものに見える」は、「八月の自然の豊富さ」の形容。「あの山の奥に……」から「世界にふき出る勢力」に至る八行は、「八月の自然の豊富さ」の具体的提示。「充ちあふれた我等の余儀ない命」を「八月の自然の豊富さ」に例えているのである。

「声を発する」は、「日の光」のはげしさの表現。「夜」に、「夜の空気がしみ渡ると／肌は声を発して苦しみよるこぶ」とあった。「雷霆」は、かみなり。「霆」は雷のはげしいもの。「刻刻の生」は「刻一刻と過ぎてゆく生」。「一ぱいに」は、力一杯に、充実させて。「本を抛つ利那の私と／本を開く利那の私と／私の量は同じだ」は、何をしようかと、自分の生命の量は変わらない、の意。つねに充実していると言いたいのである。「空疎な精励と／空疎な遊惰とを／私に関して連想してはいけない」は、仕事に励んでいるときも、遊び怠けているときも、自分の生命は満ち溢れている、の意。自分にとって、空疎な時

間というものはない、ということ。「すべてを棄て、すべてをのり超え」の「すべて」は、意識や行動を制約する、内面的、外面的なもの(束縛)のすべて。それに対して「すべてをふみにじり」の「すべて」は、俗世間の慣習の色合いが強い。「嬉嬉として」いるのは、心の自然に従っているからである。

ここには、「師走十日」にうたわれた強迫観念を克服し、自己の内面の「敵」、つまり真の自己でない自己、魂の夾雑物を排除する「戦闘」を経て、自信を取り戻し、朗らかに、智恵子を受け止める光太郎の姿がある。光太郎は、もはや、あとに引き返すことはないであろう。こうした二人の姿を見ると、二人の愛をめぐる問題は、何もないように見える。しかし、伊藤信吉氏は、ここで「詩の裏の現実の事態」に注目している。智恵子の両親との問題である。

御手かみみ只今拝見しました いろいろ御心配をおかけいたす事をおもふと 本当にすまないと存じます (中略) 先日おいでの時にお約束いたしましたことがございますね 御両親様のおころもちをうけたまはることについては あなたがたつた一つの頼みなのです お姉様はとてもそんな事を知らせては下さらないし あなたまでがお姉様のお言葉の通りにしておいでとしたら 私は何日までたつてもうけたまはるときがありません それでは困ります そのうへ正当な事を忌避するのは卑怯ですもの どうぞきつとお国元のお話をお聞かせ下さいませ

幾重にもおねがひいたします 私はものを避けるのはイヤです 何にでも正面からぶっかつて行きたうございます 常にさう心懸けて居るのでございます このごろは午後は大抵宅に居ります もしお差支のないお暇ときがありましたらおいで下さいませんか それともお差支がないならば お宅の方へお伺ひいたして もよろしうございますがそれは如何かと存じて居ります

智恵子と同居している妹長沼せき子宛の一月九日付の手紙である。同人宛、一月二十九日付の手紙には、「姉さんの事を思ふと私は何で

も出来るやうな勇氣が湧いて来ます。今の処私はお父さんやお母さんのおこゝろをお推察して其れがすこし氣になつて居ります。」という一節がある。二人のことに關して、智恵子が両親に話したか、光太郎が手紙を出して、返事がなかったか、いずれにせよ、智恵子の両親の意向が伝わらず、困惑しきっているようすがうかがえる。

カフェにて

人間の心の影の

あらゆる隅隅を尊重しよう

卑屈も、憐悪も、惨澹も

勇氣も、温良も、涌躍も

それが自然であるかぎり



「趣味」大正二年三月号に發表した小曲集「カフェ、ライオンにて」六篇の第六。初出では総ルビ、「隅隅」は「隅々」、「涌躍」は「踊躍」。「カフェ、ライオンにて」のこの詩を含む四篇は、「カフェにて」の題名で、『道程』の各所に収められているが、その場所にも注意する必要があるであらう。

一読して明らかのように、自然であること、自然に生きることこそ、人間にとつての最重要事であることを、強く主張したものである。

「人間の心」は、隅々まで明らかに見てとることが出来るわけではない。心には影の部分があり、その隅々には、善悪に關わるさまざまなきが隠されている。それらをすべて「尊重しよう」と、光太郎はいうのである。「卑屈も、憐悪も、惨澹も」は、人間の心の、悪とされる動きを列挙したもの。「憐悪」は、性質などが荒々しく、悪づよいこと。「惨澹」は、見るも無残なさま。薄暗く、ものすこいさま。

「勇氣も、温良も、涌躍も」は、人間の心の善とされる動きを列挙し

たもの。「涌躍」は、躍り上がること。とびはねること。直前の「人」の「嬉嬉として」と共通するものがある。

光太郎は、「自然」の名のもとに、「それが自然であるかぎり」、すべてを肯定する、と言いつ切るのである。自然への、絶対的信頼の表明である。

「カフェ、ライオンにて」六編のうち、収録されなかった二篇を、ここに掲げておく。

何もかもうつくしい

このビールの泡も奮激も

又其を飲む己のこころの悲しさも

かうやつて

じつと力をひそめてゐると

何処からかうれしい声が湧いてくる

酔つばらひの喧嘩さへ

リズムをうつつてひびくんだ(第二)

○

アメリカ帰りの

やりきれないヘナチヨコが

英語まじりの高話

破れる様な声で己も怒鳴りたくなつた

どなつて家が壊れたら

そればかりでも立派な仕事だ(第三)

深夜の雪

あたたかい瓦斯暖炉の火は

ほのかな音を立て

閉め切つた書斎の電燈は

しづかに、やや疲れ気味の二人を照す
宵からの曇り空が雪にかはり
さつき窓から見れば

もう一面に白かつたが

ただ音もなく降りつもる雪の重さを
地上と屋根と二人のこころとに感じ
むしろ楽みを包んで軟かいその重さに
世界は息をひそめて小供心の眼をみはる
「これ見や、もうこんなに積つたぜ」

と、にじんだ声が遠くに聞え

やがてぼんぼんと下駄の歯をはたく音
あとはだんまりの夜も十一時となれば
話の種さへ切れ
紅茶もものうく

ただ二人手をとつて

声の無い此の世の中の深い心に耳を傾け
流れわたる時間の姿をみつめ
ほんのり汗ばんだ顔は安らかさに満ちて
ありとある人の感情をも容易くうけいれようとする
又ぼんぼんとはたく音の後から
車らしい何かの響き――

「ああ、御覧なさい、あの雪」

と、私が言へば

答へる人は忽ち童話の中に生き始め
かすかに口を開いて
雪をよるこぶ
雪も深夜をよるこんで
数限りもなく降りつもる
あたたかい雪

しんしんと身に迫つて重たい雪が――

(二月十九日)

「詩歌」大正二年三月号に発表。「人に」の翌日に作られた詩で、前者の「笑ひ、戯れ、飛びはね、又抱」きあった動に対して、その後訪れた静かな安らぎをうたっている。「智恵子抄」に収録。

「人に」の舞台は光太郎の居室であつたであろう。この詩の舞台は、アトリエである。アトリエに二人の姿を見るのは、「或る宵」以来である。「或る宵」において、光太郎は、「我等は為すべき事を為し／進むべき道を進み／自然の掟を尊んで／行往坐臥我等の思ふ所と自然の定律と相戻らない境地に到らなければならない」「我等はただ愛する心を味へばいい」と智恵子に語りかけていた。その時の世俗との軋みは、二人の間では、すでに過去のものとなつたであろう。光太郎の、「自分の中にある不純の分子や濁濁の残留物」の認識からくる自己否定、自信喪失も克服された。「人に」の項の伊藤信吉氏の指摘のように、智恵子の実家との問題が残っている、といつても、二人の心が揺るがなければ、それは、解決可能な問題である。

さて、伊藤信吉氏は、「すべてが満ち足りて、いくらかはものうい気分」の二人に、雪はふたたび新鮮な情緒を送りこむ」という。「ただ音もなく降りつもる雪の重さを／地上と屋根と二人のこころとに感じ／むしろ楽みを包んで軟かいその重さに／世界は息をひそめて小供心の眼をみはる」には、世界との強い一体感が感じられる。「世界は息をひそめて」は雪の日の独特な静寂感の表現であり、「小供心」は降る雪によって呼びさまされる童心の表現である。それらを含めて、「世界は息をひそめて小供心の眼をみはる」と表現できるのは、光太郎が「世界」と一体化していなければ、不可能である。それを可能にしているのは、すでに、「おそれ」において見たように、智恵子との一体感である。「これ見や、こんなに積つたぜ」は、伊藤氏も指摘しているように、老人の言葉であろう。「ちょっと芝居の科白めいてい

る」という指摘にも賛成できる。そういえば、この詩全体が、舞台上に仕組まれているようである。「にじんだ声」も降る雪の中を抜けて聞えてくる声の感じをよくとらえている。「ただ二人手をとつて」にはじまる五行は、光太郎が『道程』の中で初めて見せる、完全にくつろぎ、安らいだ姿である。「世の中の深い心」は、この世の奥深くに存在する人類の心ともいうべきものか。ここで、「人類」を持ち出すのは、唐突の感があるかもしれないが、この詩に続いて、ほぼ一月後に書かれたのは「人類の泉」であり、その中には、「人類の生きた氣息」という表現も見られるのである。「流れわたる時間の姿をみつめ」は、しみじみと、満ち足りた、平安な時間を過ごしていることの表現であり、「ありとある人の感情をも容易くうけいれようとする」は、満ち足りた心のもたらした穏やかな、肯定的な心の表現。「泉の族」や「或る宵」などと、対照的な心情。全世界との和解の表現である。「ああ、御覧なさい、あの雪」には、「これ見や、こんなに積つたぜ」との、対照の妙がある。伊藤氏はこの二つについて、「高村家にあった江戸的なもの——「祖父と父と母」とに囲まれた旧江戸的倫理の延長の空氣」と、高村光太郎が身につけた近代的情操との差異を、はからずも親と子、前代と近代、古いものと新しいもの——という形で象徴するかのようである」という見方を示している。「童話の中に生き始め」は、光太郎が、智恵子の本質として認める、「をさな兒」の純真さが、智恵子を生き生きとさせるようすの表現である。具体的に「かすかに口を開いて」、うっとりして「雪をよろこぶ」のである。「雪も深夜をよろこんで」は、単なる擬人法と読むべきではない。光太郎の実感である。世界との一体感が、この表現を自然に生み出しているのである。「深夜をよろこぶ」のは、何ものにも妨げられず、思う存分にふるまえるからである。

以上に見てきたように、「深夜の雪」は、「人に」と相俟って、伊藤信吉氏のいう「人間の本来としての生の燃焼である」ところの愛の姿をうたったものであるが、それだけに終わってはいない。智恵子との

一体感が、世界との一体感につながり、その思いが、さらに「世の中の深い心」——人類の心ともいうべきものへとつながってゆくところに、光太郎の精神の新たな展開を示すものとして、注目すべき作品である。

智恵子との一体感ということをいったが、駒尺喜美氏は、「深夜の雪」の前半部を引用したあとに、

光太郎と智恵子との愛の交歓が始まったのは、智恵子が新潟から帰ってのち、すなわち大正二年の二月頃ではないかと思う。この頃、光太郎は立てつづけに詩をつくっているからである。二人が結ばれたのは、このあとの上高地旅行であったといわれているが、それはいずれでもかまわない。いずれにしろこの冬に、二人の愛の交歓は、はつきり始まっているからである。

と指摘している。「智恵子が新潟から帰ってのち」というのは、この一月、智恵子が新潟の友人、佐藤澄子の家に写生旅行に出かけたことをいう。実は、この時、智恵子がなかなか帰ってこず、光太郎が心配して、智恵子の妹セキに問い合わせたりしたことがあった。この事が、光太郎に智恵子の必要性をますます強く実感させ、智恵子もまた、この旅行中に、光太郎との関係について、心の決着をつけたであろうと、考えられる。このことが、「愛の交歓」の始まりとも関わりがあるであろう。駒尺氏は、さらに「人に」の前半部を引用して、「光太郎は智恵子という人を得て、新しく甦った。光太郎の自我は、智恵子の愛と信頼を浴びることによって、充足し結実する。」として、次の「人類の泉」に続けている。「人に」には、「笑ひ、戯れ、飛びはね、又抱き」という句があり、これは、たしかに、「愛の交歓」といってよい。しかし、「結ばれた」といい切ることでできる内容とはいえないであろう。この二篇のほぼ一月後に「人類の泉」(三月十五日)、さらにその八ヶ月後に「山」(十一月四日)、その一月後に「よろこびを告ぐ」(十二月五日)という詩の書かれ方を見ると、あとに、また述べるが、「結ばれた」のは、八、九月の上高地旅行と見るのが自然

である。そして、このことは、「それはいずれでもかまわない」といえるような問題ではないのである。

人類の泉

世界がわかかわかしい緑になつて

青い雨がまた降つて来ます

この雨の音が

むらがり起る生物のいのちのあらはれになつて

いつも私を堪らなくおびやかすのです

そして私のいきり立つ魂は

私を乗り超え私を脱れて

づんづんと私を作つてゆくのです

いま死んでいま生れるのです

二時が三時になり

青葉のさきから又も若葉の萌え出すやうに

今日もこの魂の加速度を

自分ながら胸一ぱいに感じてゐました

そして極度の静寂をたもつて

ちつと坐つてゐました

自然と涙が流れ

抱きしめる様にあなたを思ひつめてゐました

あなたは本当に私の半身です

あなたが一番たしかに私の信を握り

あなたこそ私の肉身の痛裂を奥底から分つのです

私にはあなたがある

あなたがある

私はかなり惨酷に人間の孤独を味つて来たのです

おそろしい自棄の境にまで飛び込んだのをあなたは知つて居ます

私の生を根から見てくれるのは
私を全部に解してくれるのは
ただあなたです

私は自分のゆく道の開路者です

私の正しさは草木の正しさです

ああ、あなたは其を生きた眼で見てくださいるのです

もとよりあなたはあなたのいのちを持つてゐます

あなたは海水の流動する力を持つてゐます

あなたが私にある事は

微笑が私にある事です

あなたによつて私の生は複雑になり、豊富になります

そして孤独を知りつつ、孤独を感じないので

私は今生きてゐる社会で

もう万人の通る道路から数歩自分の道に踏み込みました

もう共に手を取る友達はありません

ただ互に或る部分を了解し合ふ友達があるのみです

私は此の孤独を悲しまなくなりました

此は自然であり、又必然であるのですから

そして此の孤独に満足さへしようとするのです

けれども

私にあなたが無いとしたら――

ああ、それは想像も出来ません

想像するのも愚かです

私にはあなたがある

あなたがある

そしてあなたの内には大きな愛の世界があります

私は人から離れて孤独になりながら

あなたを通じて再び人類の生きた氣息に接します

ヒユウマニテイの中に活躍します

すべてから脱却して
ただあなたに向ふのです

深い、とほい人類の泉に肌をひたすのです

あなたは私の為に生れたのだ

私にはあなたがある

あなたがある、あなたがある

(三月十五日)

「詩歌」大正二年六月号に発表。初出には「某女史に」の献辞がある。「某女史」は長沼智恵子をさす。『智恵子抄』に収録。

詩では、まず、「青い雨」の季節であることが告げられる。「青い雨」は、新緑の季節に降る雨である。「新緑の毒素」(前出、明治44・6作)には、自然界、人間界、そして光太郎自身が、「性の昂奮」に巻き込まれ、神経の擾乱を引き起こす様子がうたわれている。「あをい雨」(前出、明治45・6作)には、陰鬱な六月の雨に性的抑圧感を強いられながら、降りしきる雨の中で、誰かが何処かで、自分を待っている、という予感と期待をうたい、現状を脱する方向を模索する心情をうかがわせた。そして今、「この雨の音が／むらがり起る生物のいのちのあらはれになつて／いつも私を堪らなくおびやかすのです」という。「むらがり起る生物のいのちのあらはれになつて」は、さまざまな生きものの生命力が具体的な形をして、の意。この、生命力の具体的な形とは、もう一つ、具体的にいえば、性の衝動力ということになる。「いきり立つ魂」は、はげしく興奮した魂の意。「私を乗り超え私を脱れて／づんづんと私を作つてゆくのです」は、古い自分を乗り越え、脱して、新しい自分が作られてゆくこと。「新緑の毒素」では、性の興奮は、生命力の無方向な奔逸に終わったが、ここでは、新しい「私」の創造という一方向に収斂されている。「死んで」は古い生命が、「生れる」は新しい生命が、である。「二時が三時になり／青葉のさきから又も若葉の萌え出すやうに」は、自然、必然の意。「魂の加速度」

は、魂が加速度を加えて成長すること。「極度の静寂を保つて／ちつと坐つてゐました」は、「新緑の毒素」における「毒々しいまでの生の昂揚」(北川太一)を意思的に抑制している様子を表現している。

「あなたが一番たしかに私の信を握り」は、「郊外の人に」の「汚れ果てたる我がかずかずの姿の中に／をさな児のまこともて／君はたぶとき吾がわれをこそ見出でつれ」にかやうものである。「信」は、信実、まこと。「肉身の痛裂」は肉と魂の分裂により、肉体が引き裂かれるような苦痛を味わうこと。「私はかなり惨酷に人間の孤独を味わつて来たのです」は、帰国以来の精神の故郷を見失つたという苦痛からくる孤独感。「自棄の境にまで飛び込んだ」は、同じく、帰国以来のデカダンスの渦中であつた生活をさす。「私の生を根から見てくれる」の「生」には、初出では「ライフ」とルビがあつた。それが「いのち」へと変えられたのは、光太郎の自我の確立と関わりがある。一言でいえば、光太郎は、智恵子(の愛)を得たことによって、見失つた故郷に代わるもの、あるいは、故郷そのものを見出だしたのであり、そのことによって自己のアイデンティティを確立し得たのであり、西洋に対する劣等意識から解放されたのである。光太郎の「生」は、もはや、「ラ・ギイ」でも「ライフ」でもなく、「いのち」になり得たのである。「根から」は根本からであるが、続いて出てくる「草木」と関わりがある。「開路者」、「ピオニエ pionier (フランス) は先駆者、開拓者。「草木の正しさ」は、自然の律に従うものただしさ。「生きた眼で見てくれる」については、「カフェにて」(「おれの魂をつかんでくれ」)の、『夜目遠目笠のうち』／そればかりは真平だ」が参考になる。「もとよりあなたはあなたのいのちを持つてゐます」は、智恵子を独立した一個の個性として認識していることの確認。「海水の流動する力」は、豊かで活発な生命力の表現である。ここで、少し深読みをすれば、海水を水と読むことができれば、海水は草木を枯らす、水は草木の成長に必要なものである。この読みが可能であれば、草木(光太郎)が主で水は従という関係が、光太郎の中に、無

意識にでもあれ、あったということになるのだが。「あなたによつて私の生は複雑になり、豊富になります」の「生」は、初出では「命」。「私の生」が「複雑に」なるのは、智恵子の生命力、可能性が加わるから、というより、智恵子は光太郎にとつて世界と同義であるからであり、「豊富」になる」とほぼ同意と考えてよい。その結果、「孤独になりつつ、孤独を感じない」のである。「孤独に」なるのは、次行にも書かれているが、「私は自分のゆく道の開路者」であるからである。「孤独を感じない」のは、自分がすでに魂の故郷を得ているからである。「私」が「此の孤独を悲しまなく」ったのは、「此の孤独」が「自然であり又必然である」からである。そして、「此の孤独に満足さへしようとする」のは、「此の孤独」の中で、「私の生」を存分に発現することができるところである。伊藤信吉氏の言葉をかきれば、「自我の発現のために生じる葛藤から身をひるがえして、孤独の充足感へと、自意識の発現型態とその在り方が変化した。」「孤の世界の設定によって個の位置を包括した。」「高村光太郎」前出」ということになる。「私にはあなたがある／あなたが」は、後出の「あなたは私のために生れたのだ」とともに、いろいろと物議を醸してきたところである。「私にはあなたがある」といいながら、「あなたには私がある」とはいわない、「あなたは私のために生れたのだ」といいながら、「私はあなたのために生れたのだ」とはいわない、ということである。光太郎の無意識の中の男性中心主義が、ここに露呈している、というのである。つづけて、「あなたの内には大きな愛の世界があります」といえば、それもまた、強制になりかねない、というのである。ここは難しいところである。

この詩のもう一つの問題は、光太郎が、「あなたの内」の「大きな愛の世界」に支えられ、「私は人から離れて孤独になりながら／あなたを通じて再び人類の生きた氣息に接します」というところにある。ここに「人類」が姿を現すのは、白樺派に親近していたことを示している。それはそれとして、世俗、あるいは社会は否定され「人類」という抽象的なものに、「生」のよりどころが求められていることになり。「――に」(前出、明治45・7)において、すでに、「万人の世界」の否定が明言されていることは、見たとおりである。「万人の世界」が否定されたのは、個性が喪失された世界だからである。そして今、光太郎は「私の生」にすべてを賭けて生きようとしているわけである。その「私の生」が、光太郎の意識において、「孤独」であることによつて充足されることは、伊藤信吉氏の指摘のとおりである。そして、光太郎は、その「私の生」が「人類」に直結するというのである。「私の生」という、あくまで主観的に把握されたものと、「人類」という、やはり、主観的に把握されたものの結合――。この観念性は、やはり、ある危うさを内包していると言わざるをえない、ということである。光太郎は、「人類の生きた氣息に接します／ヒユウマニテイの中に活躍します」というが、世俗、あるいは社会に向かわないこの「ヒユウマニテイ」は、やはり、空虚な観念にすぎない、という批判を免れえないであろう。「深い、とほい人類の泉に肌をひたす」という「人類の泉」は、人類の生命の根源とでもいふべきであろうか。

この詩は、「あなたは私のために生れたのだ／私にはあなたがある／あなたがある、あなたがある」と結ばれる。先に、この問題はむずかしいところがある、と言ったのは、この詩は、光太郎が智恵子に向かって、彼女が「本当に私の半身」であることを告げ、「万人の通る道路から数歩自分の道に踏み込」んだ現在の孤独にあつても、彼女を通じて「深い、とほい人類の泉に肌をひたす」ことができる、光太郎の精神における智恵子の存在の意味を語りかけたものだからである。つまり、この詩の流れは最初から一方的なものなのである。「もとよりあなたはあなたのいのちを持つてゐます／あなたは海水の流動する力をもつてゐます」という箇所は、その流れをせきとめるように見えるが、「あなたによつて私の生は複雑になり、豊富になります」という一行によつて、もとの流れの中に取り込まれているのである。しかし、詩の流れの必然性をいったところで、光太郎の「男主体の発想」

(駒尺喜美)は否定し得ないが、この問題は、「僕等」を読むときに改めて取り上げたい。

山

山の重さが私を攻め囲んだ

私は大地のそそり立つ力をこころに握りしめて

山に向つた

山はみじろぎもしない

山は四方から森厳な静寂をこんこんと噴き出した

たまらない恐怖に

私の魂は満ちた

ととつ、とつ、ととつ、ととつ、と

底の方から脈うち始めた私の全意識は

忽ちまつばだかの山脈に押し返した

「無窮」の力をたたへろ

「無窮」の生命をたたへろ

私は山だ

私は空だ

又あの狂つた種牛だ

又あの流れる水だ

私の心は山脈のあらゆる隅隅をひたして

其処に満ちた

みちはちけた

山はからだをのして波うち

際限のない虚空の中へはるかに

又ほがらかに

ひびき渡つた

秋の日光は一ぱいにかがやく

私は耳に天空の勝鬨をきいた

山にあふれた血と肉のよろこび！

底にほほゑむ自然の慈愛！

私はすべてを抱いた

涙がながれた

(十一月四日)

「山」は、「文章世界」大正二年十二月号に発表。初出では、全文にルビ。また、『道程』所収形の第一連と第二連の間のアキがなく、全四連の構成。

はじめに、光太郎の「智恵子の半生」から、この詩に関わりのあるところを引用しておきたい。

大正二年八月九月の二箇月間私は信州上高地の清水屋に滞在して、その秋神田のヴェキナス倶楽部で岸田劉生や木村莊八君等と共に開いた生活社の展覧会の油絵を数十枚画いた。其の頃上高地に行く人は皆島々から岩魚止を経て徳本峠を越えたもので、かなりの道のりであつた。その夏同宿には窪田空穂氏や、茨木猪之吉氏も居られ、又丁度穂高登山に來られたウエストン夫妻も居られた。九月に入つてから彼女が画の道具を持つて私を訪ねて來た。その知らせをうけた日、私は徳本峠を越えて岩魚止まで彼女を迎へに行つた。彼女は案内者に荷物を任せて身軽に登つて來た。山の人もその健脚に驚いてゐた。私は又徳本峠と一緒に越えて彼女を清水屋に案内した。上高地の風光に接した彼女の喜は実に大きかつた。それからは毎日私が二人分の画の道具を肩にかけて写生に歩きまはつた。彼女は其の頃肋膜を少し痛めてゐるらしかつたが山

に居る間はどうかやら大した事にもならなかつた。彼女の作画はこの時始めて見た。かなり主観的な自然の見方で一種の特色があり、大成すれば面白からうと思つた。私は穂高、明神、焼岳、霞沢、六百嶽、梓川と触目を悉く画いた。彼女は其の時私の画いた自画像の一枚を後年病臥中でも見てゐた。その時ウエストンから彼女の事を妹さんか、夫人かと問はれた。友達ですと答へたら苦笑してゐた。当時東京の或新聞に「山上の恋」といふ見出しで上高地に於ける二人の事が誇張されて書かれた。多分下山した人の噂話を種にしたものであらう。それが又家族の人達の神経を痛めさせた。十月一日に一山挙つて島々へ下りた。徳本峠の山ふところを埋めてゐた桂の木の黄葉の立派さは忘れ難い。彼女もよくそれを思ひ出して語つた。

文章は、「それ以来私の両親はひどく心配した。」とつづくのだが、それは、また、別の問題である。文中のウエストンはイギリスの牧師、登山家。明治二十一年より三度にわたり来日、宣教のかたわら日本アルプスその他を踏破。小島烏水らに日本登山会の設立をすすめるなど、日本登山界の発展に貢献し、日本の近代登山の父と呼ばれる。上高地に記念碑があり、毎年六月にウエストン祭が日本アルプスの山開きの行事として行われている。また、「山上の恋」は『全集』第七巻の月報によると、「東京日日新聞」大正二年九月五日の「美しい山上の恋——洋画家連中口アングリ——」という記事である。光太郎の文中にある、岩魚止での出迎への情景を描き、「美術家連は嘩然として狐につまゝれたやう、此男女こそは誰あらう彫刻家の泰斗高村光雲氏の息高村光太郎氏と青鞥社員で女流洋画家の長沼智恵子である、二人が相愛の仲は久しいもので今では「別居結婚」をしてゐる仲ぢやもの、二人して日本アルプスの大景に接し乍ら文展の制作を急がうといふ其企てから智恵子が早くから滞在してゐる、光太郎氏を訪ふたものと知れた——と岡焼生からの便りがあつた」というものである。「岡焼」は、直接自分に関係もないのに、他人の仲のいいのをねたむこと。——

高村光太郎『道程』を読む(六)

生」は、その人の意。

一方、智恵子は、この山行に先立って、八月十二日、郷里の母センに宛てて、次のような手紙を送っている。

お手紙拝見いたしました。私はいく度申しあげましたも同じでございませう。ほんとに真剣にいたしますのですから、どうぞしばらくご都合下すつておかし下さいませう様に母上様からお話し下さいませ。どうぞお願い申しあげます。こんどといふこんどこそは、何がなんでもいい絵をかいて、そして生活をしてゆかなければならないのですから。私はかうしてはゐられないのですから。今からいそいでかゝなければならぬのですから。こんどといふこんどこそはどうぞ私を信じて下さいませ。こんなにお願ひしては相すまないのですけれども。おくれではまたまただめになりますからどうぞ〜お願い申しあげます(中略)

此度はほんとうに自分でも出来る自信があるとおもひます。どうぞたすけると思召して。今度だけ暫くの間御都合下さいませ。偏に御願ひ申し上げます。どう(ぞ)母上様よりお話し下さいませ。これは何につかふのでもありません。ずつと前から申しあげました通り。文部省の展覧会に出しますか。また大阪の方で個人展覧会をいたしますか。何れにしてもそれ等の絵を売りました上ですぐ御返済申しあげます。また自分の生活の方も。しっかり土台をきめてかゝらなければなりません。これは随分たしかなのでございませう。しかしこれより外私からはどうも申しあげ様もありません。母上様にはこれまでとてもどれ程の御心配をかけましたか。またこんなお願ひを申あげては申しわけありません。んけれども。きつと安心していただく様にいたしますからくれぐれもお願ひ申あげます(後略)

見るとおり、母を通して、父から金を借りたい、という内容である。「何がなんでもいゝ絵をかいて、そして生活をしてゆかなければ」といい、「自分の生活の方もしっかり土台をきめてかゝらなければ」な

らない、といい、そのために、今、大至急で金が必要なのだという。

それにしても、この文章の、なんと切羽つまっていることか。それは、いい絵をかくて、生活の土台を確立する、ということに間違いはないであろうが、それ以外の事情が存在することを示している。それは、もはやいまでもなく、上高地に滞在している光太郎のもとに駆けつけることである。この一事こそ、この時の智恵子にとっての喫緊の要事であったのであり、「いゝ絵」をかくことも、「生活」の「土台」を築くことも、この事の成否の上にかかっていると考えていたのであろう。

第一連。「山の重さが私を攻め囲んだ」は、「山」の擬人化というよりも、山の人格化といった方が、よりふさわしいであろう。山の重量感に圧倒されそうな感情の表現である。その圧倒感に対して、光太郎は、大地の底から「そそり立つ力」（初出では「そ、り立つ力」）を自分のものとして、立ち向かった、というのである。「こころ」は初出では「心」。しかし、山は「みじろぎもしないで」、おごそかな静寂を以て、光太郎を取り囲んだのである。「こんこん」とは初出では「滾々と」。

第二連。「たまらない恐怖」は、山の底知れぬ力に感じる恐怖である。光太郎は、魂の底から湧きはじめた全意識を集中して、山脈の力に対抗しようとするのである。「まっばだかの山脈」は、「山」を、虚飾のない、ありのままの姿を示しているものとして、表現しているのである。第一、二連は、山の重量感や圧力と、それに対峙する光太郎の精神の緊張を描いたものである。

第三連。第二連と第三連との間には飛躍がある。第一、第二連に描かれた山の重量感や圧力に、全力をもって立ち向かった光太郎は、その結果、山と一体化したのである。その結果が第三連である。「無窮」の力をたたへろ／「無窮」の生命をたたへろ」は、自然の無限の力、無限の生命を、山の存在感をとおして、体感しての讃歌である。「私は山だ／私は空だ／又あの狂った種牛だ／又あの流れる水だ」（「空」は初出では「くう」とルビ）の中では、「狂った種牛」が、いかにも

唐突で、他の三つとかけ離れているのは見易い。この上高地滞在中の体験をもとにして、大正十四年六月に、「狂奔する牛」という詩が書かれている。

ああ、あなたがそんなにおびえるのは
今のをあれを見たのですね。

まるで通り魔のやうに、

この深山のまきの林をとどろかして

この深い寂寞の境にあんな雪崩をまき起して

今はもうどこかへ往つてしまつた

あの狂奔する牛の群を。

（第一連略）

あなたがそんなにおびえるのは

どつと逃げる牝牛の群を追ひかけて

ものおそろしくも息せき切つた、

血まみれの、若い、あの変貌した牝牛を見たからですな。

けれどこの神神しい山上に見たあの露骨な獣性を

いつかはあなたもあはれと思ふ時が来るでせう、

もつと多くの事を此の身に知つて、

いつかは静かな愛にほほゑみながら――

この第三連は、光太郎と自然との一体感、および、それにより与えられた充溢感の表現である。そこに、なぜ、「狂った種牛」が加えられたのか。「私の心は山脈のあらゆる隅隅をひたして／其処に満ちた／みちはぢけた」のうち、初出では、「隅隅」は「隅々」、「みちはぢけた」は「満ちはぢけた」。

第四連は、「山」と「私」と「天空」との三者が登場する。「からだ

をのして」は、体を伸ばして。「際限のない」は、初出では「際限もない」。「はるかに／又ほがらかに／ひびき渡つた」という「山」は、まさしく、一個の生命体である。「勝鬨」は戦いに勝った時に、一斉に発する叫び声である。この「勝鬨」は、「天空」の、つまり自然の、事が成就したことを祝い喜ぶ叫び声であろう。その「事」は、「山は……ひびき渡つた」と関わりがあるであろう。ほがらかな響きを発する「山」は、光太郎であろうか。「天空の勝鬨」は、「山」と光太郎の一体化を祝い喜ぶ叫びである。

第五連。「山にあふれた血と肉のよろこび」とは、何であろうか。「底にはほゑむ」の底は、「よろこび」の底であろう。「私はすべてを抱いた」の「すべて」は、とりあえず「自然」と考えられ、自然との一体感の表現と考えられるが、それだけでよいであろうか。

この上高地における、光太郎と智恵子との合流について、伊藤信吉氏と郷原宏氏は、共に、犬吠埼における二人の出会いを想起しているが、伊藤氏は、「犬吠岬の海には波がうねっていた。上高地には山々が重なり脈打っていた。「山はからだをのして波うち／際限のない虚空の中へはるかに／又ほがらかに／ひびき渡つた」(「山」部分)。こういう健康な精神で高村光太郎は一夏のあいだ制作し、長沼智恵子を迎えてその感情を波打させたのである。」(『鑑賞智恵子抄』)というだけで、特別なことはいっていない。郷原宏氏は、光太郎の「智恵子の半生」の先に引用した箇所を引用したあと、

こうして二人の愛は成就した。犬吠埼のときは「もし私が何か無理な事でも言ひ出すやうな事があつたら」智恵子は「即座に入水して死ぬつもりだつた」といわれるが、こんどはもうその心配もなかっただろう。このとき最終的に婚約をかわしたことが、光太郎の「山について」のなかに記されている。下山後一か月ほどたつてから、光太郎は次のような詩を書いた。

山にあふれた血と肉のよろこび！
底にはほゑむ自然の慈愛！

高村光太郎『道程』を読む(六)

私はすべてをだいた
涙が流れた

郷原氏は、犬吠埼の時の「無理な事」というのは、「前後の文脈からして肉体関係の強要をさすものと思われる」と考え、智恵子の「入水して死ぬつもりだつた」といったのに対して、「こんどはもうその心配もなかっただろう」といい、「婚約」のこと、そして、「山」の最終連の引用と続けている。郷原氏が引用している「山について」は、全集第十一巻によれば、昭和十年八月一日発行『制作』第二巻第八号に掲載されたアンケートで、設問は、「印象の山山／一、山の名／一、その印象」である。光太郎の答えは、「一、山は重に低山を所々歩きました、大正二年夏期二箇月間上高地に滞在して山岳嶽生に暮した日夜の詳細な記憶がいまだに昨日の如くあざやかです。其処ではじめて妻の智恵子と婚約をしました。／自然と人事の交錯に小生は最大の喜を感じます。自然のみの自然は無慈悲で物凄く絶対力です。」である。

郷原氏が、おそらく、ここで示唆しているように、光太郎と智恵子は、上高地において、肉体的にも結ばれたのである。光太郎が「婚約」というのは、そのことを光太郎流にいったのである。こう考えて、初めて、「狂つた種牛」が登場することを初め、この「山」という詩の曖昧な部分も、この詩の次に「よろこびを告ぐ」が位置することの必然性も、明らかにするのである。

よろこびを告ぐ

— TO B LEACH —

私の敬愛するアングロサクソンの血族なる友よ
シエクスピアを生み、ブレエクを生み
ニュウトンを生み、デアキンを生み

タアナアを生み、ビアズレエを生み

そして又、オオガスタス・ジョンを生んだ血族から生まれた友よ
飽くまで正しい心と敬虔な魂とを有するわが友よ

今こそ喜びの時は来た

太陽のかがやく大道のまつただ中に奇蹟は起つた

失はれた道は与へられ

夢は碎け去り

まよはしは尾を巻いて遠く逃げ

おぼろにけむる美しさは

隅隅までも照し渡る光の中に全身をあらはし

すべての能はただ一条の力の中にあざなはれる時が来た

ああ、わが友よ

私の為に強くこの手を握りたまへ

喜を以てわが為に握りたまへ

無惨なる廢頹者の血は遂にかの全能の光の為に浄められた

闇と濁とに蝕はれた私の肉身は遂に醜い殻を脱いだ

ああ、わが異邦の友よ

君に此を語り得る私のよろこびを思ひ給へ

私のまことを知り、私のまことを信じ、私のまことを心から惜ん

でくれた友よ

私の敬愛するアングロサクソンの血族なる友よ

広重の水の流れる国

春信の女のわらひささめく国

この国に四年を過ぎた君は

もはや広重の水、春信の女を恋ひ慕ふ事を為まい

君は遠くこの国にあこがれ来て、この国のまことの相を見た

わが友よ、わが友よ

しかし、この国の魂を君のこころに容易く定めたまふな

そして私の敬愛するアングロサクソンの民族に告げたまへ

世界の果てなる彼処に今まことの人の声を聞けりと

又、世界の果てなる彼処に今いさましく新しき力湧けりと

ああ、わが異邦の友よ

この力は今小さいが、生ある者は伸びずには居ない

この根は張れるだけ深く、遠く、細かく、広く張るだろう

すべての生から生の肥料を求めらるう

そして、極めてのろく、極めてたしかに、芽を吹き、芽をふき伸

びるだらう

今まで見た事のない生が姿を現すだらう

待ち、且つ見よ

ああ、此を君に語り得る私のよろこびを思ひたまへ

飽くまで正しい心と敬虔な魂とを有するわが友よ

私の苦しみはこれから本当にしん身の苦しみになるに違ひない

私の悩みは私に死力を出させないでは置かないに違ひない

私の悲しみは私をしばしば濡れしほませるに違ひない

しかし、私の喜は私の生を意識する時たちまち強大な力となつて

あらはれるに違ひない

ああ、友よ、わが敬愛する異邦の友よ

私のために祈りたまへ

彼処なる生に祝福あれ、伸びよ、育てよ、と

(十二月五日)

「詩歌」大正三年一月号に発表。「B. LEACH」はバーナード・リー

チ。この詩は、かつて自己の故郷喪失者としての苦悩と、清められる

ことによる救済の予感、あるいは決意を、「廢頹者より」(明治44・6)

として捧げた、あるいは、訴えたりーちに、奇蹟的に訪れた新生の喜

びを告げたものである。初出との異同は最小限にとどめる。

第一連。「廢類者より」の書き出しは、「寛仁にして真摯なる友よ／わが敬愛するアングロ、サクソンの血族なる友よ」であったのに対し、「私の敬愛するアングロサクソンの友よ」と、口語体に変わり、第一行が省略されている。この省略は、二人の関係の変化を示している、と見てよいであろう。今、光太郎は、リーチと精神的に対等の立場にたっているのである。かわりに、「アングロサクソンの血族」の素晴らしさを証明する人々の名前が、列挙される。それらの人々の、細かい説明は必要ないであろう。「シエクスピア」は詩人、劇作家。「ブレエク」は詩人、画家。「ニュウトン」は物理学者、天文学者、数学者。「デアキン」は生物学者。「タアナア」は画家、「ビアズレエ」も画家。光太郎の「バーナード リーチ君に就いて」(『美術新報』大正3・2)に、「キリアム ブレークは同君の昔から崇拜してゐる天才で、又同時代ではアウガスタス ジョンを始終尊敬して居ます。」とあることを、つけ加えておく。『近代詩集の探究』は、この詩人、画家、科学者の列挙について、光太郎は、「すぐれた文化を生み育てた」「アングロサクソンの血族」を「前にもまして意識」していることを、正しく指摘している。「飽くまで正しい心と敬虔な魂とを有するわが友よ」は、「寛仁にして真摯」が、リーチの光太郎に対する姿勢を中心においているのに対し、リーチの人格を、宗教的側面を強調して、表現している。ここに、この詩を書いた時の、光太郎の精神の反映を見ることができる。繰り返しのようになるが、今、光太郎にとって、リーチは、単に、「寛仁にして真摯」な友人ではなく「飽くまで正しい心と敬虔な魂」の持ち主でなければならぬのである。「正しい心」で、光太郎の真の姿を見てもらいたいのである。

さて、光太郎は、そのような友人であるところのリーチに対して、「今こそ喜びの時は来た」とつづるのである。その「喜び」は、光太郎にとって「奇蹟」であった。自ずから心に湧いた「喜び」であった。場所は「太陽のかがやく大道のまつただ中」である。この場所は、光

太郎の存在の正しさの証しである。しかし、つづいて、「失はれた道は与へられ／夢は砕け去り／まよはしは尾を巻いて遠く逃げ」とあるところから見れば、その時、光太郎は過去の迷妄を引きずっており、その状態から、その瞬間、「太陽のかがやく大道のまつただ中」に投げ出された、ということになるであろう。それでこそ、「奇蹟」の名にふさわしい。このことについては、詩「道程」の項でまた触れる。「おぼろにけむる美しさ」は、「夢」を砕き、「まよはし」を追いやり、「失はれた道」を取り返してくれたものの宗教的雰囲気、象徴的に表現したもの。具体的に見えるものは、「太陽のかがやく」光の中に「おぼろにけむる」光としか読みとれない。しかし、その「おぼろにけむる美しさ」によって、光太郎の「能」(能力、可能性)は「ただ一条の力の中に」より合わせられる、言葉をかえれば、自己の生の発現という一点に集中されるようになった、ということであろう。「無惨なる廢類者」は、前出の「廢類者より」を踏まえた表現。絶望的な思いから、自暴自棄な生活を送っていた過去の自分。「かの全能の光」は「おぼろにけむる美しさ」の言い換えであり、奇蹟を起こした存在である。神に近い存在を想像するより他はないが、ここで、光太郎は、なぜ自然とそれを呼ばないのか、という思いを禁じ得ない。光太郎にとって、絶対的な存在であるはずの、自然をも超える力の存在を、この「奇蹟」の瞬間に、光太郎は感得したのか。あるいは、事は奇蹟のように起こり、自然とは呼ぶことができないからか。「闇と濁とに蝕はれた私の肉身は遂に醜い殻を脱いだ」の「肉身」は、『広辞苑』第五版によれば、「肉体と同じ」とあるが、光太郎の場合は、肉体と魂との総合、統一体を意味するか。ここで、改めて見直してみると、光太郎は「夏の夜の食欲」(大正元・8)までは、肉体と魂の一体化し得ない苦しみを、繰り返して来ている。「肉身」は、「戦闘」(大正元・12)に、「敵は私の肉身に喰ひ入つてゐる味方の中にも」、「私の肉身に喰ひ入つてゐる味方」とあり、「人類の泉」(大正2・3)に「あなたこそ私の肉身の痛裂を分つ」とあり、単に、肉体の意味で

は、いずれの場合も、解釈しきれない。「異邦」は外国のことであるが、ここでリーチを、「わが友」ではなく、「わが異邦の友」と呼ぶのは、光太郎の中に、日本人としての意識が湧いてきたためで、それが、次連につながってゆく。最終行の、「私のまことを知り、私のまことを信じ、私のまことを心から惜んでくれた友よ」に見られる、「私のまこと」の反復は、それを再確認し得た喜びを示すものであろう。

第二連。「広重の水の流れる国」から「この国のまことの相を見た」までの五行は、「廢頽者より」に、リーチが、明治四十二年一月に、「桜咲き、広重の水の流れる日本」に「何物かを」を、慕って来たことが書かれていることをふまえている。「春信」は江戸中期の浮世絵師、鈴木春信。多色摺木版画の技術を開発し、錦絵を完成。また、抒情的な美人画に独自の境地を開いた。「君はこの国にあこがれて来て、この国のまことの相を見た」という、「まことの相」は、否定的な意味で用いられている。「しかし、この国の魂を君のところに容易く定めたまふな」というのは、リーチが、「世界の果てなる彼処」、つまり日本に、「今まことの人の声」を聞き、「今いさましく新しき力」が湧いたのを見たはずであるからである。光太郎は、それを敬愛する「アングロサクソンの民族」に告げるように、リーチに懲憑するのである。「まことの人」「いさましく新しき力」は、いうまでもなく、光太郎自身をいうのである。そして、光太郎は、「この力は小さいが、生ある者は伸びずには居ない」（初出では「居ない」は「居られない」と、自らを「生ある者」と呼ぶ。その「生」は、光太郎が「人類の泉」で、「私の正しさは草木の正しさです」といった、いわば、自然そのものであるところの草木的生命である。「この根は張れるだけ深く……」以下、「……芽を吹き伸びるだらう」の三行は、そのことを語っている。「今まで見た事のない生」は、自己の新生した姿に対する確信の表現である。「待ち、且つ見よ」は、初出では「待つてくれ見てゐてくれ」。

第四連。光太郎は、ただ喜びに浮かれているわけではない。これか

ら、「私の生」を発現するために必然的に受けることになるであろう。「苦しみ」「悩み」「悲しみ」に思いをやり、しかし、「私の喜は私の生を意識する時たちまち強大な力となつてあらはれるに違ひない」と、あくまで、「私の生」への確信を語るのである。

第五連において、リーチに、「私の生」のために、「祝福あれ、伸びよ、育てよ」と「祈りたまへ」と、再度、懲憑して、詩は結ばれる。末尾は『道程』では「育てよ、よ」であるが、誤植と判断し改めた。

以上のように、この詩は、光太郎に訪れた新生の喜び、「廢頽者より」の言葉をかりれば、「転化」の訪れた喜びを語る。それは「奇蹟」のように訪れた「私の生」の発見にほかならない。この詩が、かつての「廢頽者より」に対応するものであるならば、そして、それは光太郎の意識において、正しくその通りなのであるが、そこで問題になるのが、光太郎が、「廢頽者より」で提示した「故郷」の問題である。

『近代詩集の探究』は、次のように考えている。

「廢頽者より」において光太郎は、リーチの「故郷」をもって自己の「故郷」にかえることはできなかった。ここには所謂近代主義者たちの、西欧を自己の「故郷」と意識するような錯覚はなかった。しかし、日本の土壌もまた彼にとって「故郷」とは意識されるものではなかった。そこに矛盾争闘の悲しみが存在していたのだ。いま光太郎はリーチによるこびを告げるわけだが、それは「故郷」の発見ではなく「生」の発見であった。「生」という歴史性の捨象された無規定なものを主体的に見出すことで、光太郎は出口を開いたのである。「生」の発見が「アングロサクソンの血族」に對し得るのは、「あなたによつて私の生は複雑になり豊富になります。そして孤独を知りつつ、孤独を感じないのです」（「人類の泉」という智恵子とつながる精神の背景がすでに成立していたことによると言えよう。そうして「自然に根ざした孤独はとりもなおさず万人に通ずる道だ」（『冬の詩』）という白樺派的ヒューマニズムに通ずる意識がそれをさらに固めていたのだと

思われる。

ここに書かれていることに、間違いはない。特に、光太郎の発見した「生」が、「歴史性の捨象された無規定なもの」という指摘は鋭い。しかし、そのあたりを、もう少し考えておきたい。

光太郎は、なぜ自らを「廃頹者」と呼ばなければならなかったのか。それは、光太郎が、「私の生」を見失ったからではなかったか。「生けるもの」（明治43・12、推定）において、「我も生けるものなり」「生けるものをして望むがままに生かしめよ」と叫んだときから、光太郎にとって、「私の生」の発現こそが唯一にして最大の願いであったはずである。「生けるもの」を読んだ時、当時の展覧会の批評において、光太郎は「生」の発現を評価の基準に据えながら、自身は「生」の体現者ではあり得ない、という状態にあったことを述べた。光太郎は、「余に故郷なし」といい、故郷喪失者であることに、「廃頹者」であること、つまり「生」の発現の不可能な者であることの原因を自ら措定したわけであるが、そのような自分に、「転化」「改造」が訪れるであろうこと、それは「清められ」という形においてであろうことを、それにつづけて語っているのである。「転化」とは変化して他の状態になることである。つまりこの時、光太郎は「故郷」の問題を切り離したのである。このことは、光太郎の方向性を奪う結果になったであろう。ここから、光太郎の彷徨が始まったわけである。光太郎は、「故郷」を発見するかわりに「生」を発見したわけではなく、「生」を発見したことが、すなわち、「故郷」を発見したことになるのではないか。なぜ、「生」を発見することができたのか。光太郎は、それを「奇蹟」と呼んでいるが、「奇蹟」であるはずはない。『近代詩集の探究』が指摘するように、いや、それ以上に、智恵子の存在が、大きな意味を持っているであろう。それは、数々の詩を巡って、これまでに見てきた通りである。

現実

感激の枝葉を刈れ
感動の根をおさへる

「我等」大正三年一月創刊号に発表された総題「詩数篇」全六篇の六篇目。『道程』に収録されたのは、その第一連で、第二連は次の通りである。

みんな他が言つた

詩はわからない程いいのだとえらい人が言つた

詩はつかまへ様のないのがいいとなつかしい詩人が言つた

詩は一氣息でなければならぬと巧者な批評家が言つた

みんな他が言つた

言つた人の生の裏書きになる事を言つた

其処がいいのだ、たつた一つ

「枝葉」は枝と葉。物事の本筋でないこと。主要でない部分。「枝葉末節」といえば、物事の本質からはずれた、ささいな部分。初出では「えだは」とルビ。「感激」した時は、感激の枝葉の部分を取り除き、「感動」した時は、その感動の起る根元をしっかりと押さえ、掴み取れ、ということ。しかし、これだけでは、何のためにこの詩を書いたのか。なぜ、この詩に「現実」という題がつけられたのか、理解したい。そこで、『道程』収録の際に削除された部分を見ることにする。

光太郎は、詩について、「えらい人」「なつかしい詩人」「巧者な批評家」が言ったことを並列してみせる。「巧者」は巧みなこと。熟練していること。そして、それを、「みんな他が言つた」ことだと、突き放したような言い方をする。それぞれの内容に、光太郎が納得して

いるとは思えない。そういう口振りである。しかし、光太郎は、それぞれの言葉が、「言つた人の生の裏書きになる」、つまり、言つた人の「生」のあり方を、それらの言葉から読み取ることができると言い、それらの言葉の意味は「たつた一つ」、そこにあるのだ、と皮肉にいうのである。すると、第一連の二行、「感激の枝葉を刈れ／感動の根をおさへろ」は、自分に言い聞かせる言葉で、そうすることによって、自分の「生」が見えてくる、表現できる、というのであろう。第二連の皮肉なもの言ひは、第一連の内容を受けるにふさわしくない、ということで削除されたのであろう。「現実」という題は、第二連に関わつてのものであろう。

冬が来た

きつぱりと冬が来た

八つ手の白い花も消え

公孫樹の木も帯になつた

きりきりともみ込むやうな冬が来た

人にいやがられる冬

草木に背かれ、虫類に逃げられる冬が来た

冬よ

僕に來い、僕に來い

僕は冬の力、冬は僕の餌食だ

しみ透れ、つき抜け

火事を出せ、雪で埋めろ

刃物のやうな冬が来た

(十二月五日)

「我等」大正三年一月号に発表の「詩數篇」の第一の詩。この詩が書かれた十二月五日は、「よろこびを告ぐ」の書かれた日である。光太郎の新しい「生」を告げる第一声ということになる。さきに見た「冬が来る」(大正元・12)において、光太郎は冬という季節を、「寒い、鋭い、強い、透明な冬」「強い、鋭い、力の権化の冬」と呼んだ。「冬が来る」は、光太郎と智恵子とをめぐるゴシップの嵐の中で、世俗を否定し、「我等はただ愛する心を味」わい、「あらゆる紛糾を破つて／自然と自由とに生きねばならない」という決意を、智恵子に語りかけた「或る宵」と同日に書かれたものである。そして、「冬が来る」においては、「私達の愛を愛といつてしまふのは止さう／も少し修道的で、も少し自由だ」とうたっている。

さて、「冬が来た」である。第一連。光太郎は、まず、「きつぱりと冬が来た」と、簡潔な言葉で、冬という季節の到来を明確に印象づける。晩秋から初冬の季節を彩つた、「八つ手の花」も「公孫樹」の黄葉も、一気に画面から消し去つてしまふ。「公孫樹の木も帯になつた」は、葉がすつかり落ち尽くしたいちちょうの樹を竹帯を逆さに立てた様子に見立てたものであるが、ずばりと言ひ切つて、爽快である。「帯」は「帯(帯)」の異体字。

第二連。「きりきりともみ込むやうな」という形容について、『近代詩集の探究』は、冬の「苛烈な浸透力」の表現である、とし、「泥七宝」の「きりきりと錐をもむ／用はなけれど錐をもむ／錐をもめば板の破るうれしさに」という短詩を想起させるが、そこにある無目的な虚無のいとなみにおいては、もうここにはない。」と指摘する。『道程』を初めから読み進めて来ると、この一行から、自然に「泥七宝」の錐の短章を思い出し、同じ感想を持つことであらう。次に「人にいやがられる冬」とあるが、光太郎の、次に取り上げる「冬の詩」によれば、冬をいやがる人は「弱者」である。

第三連では、第二連の「人にいやがられ」「草木に背かれ、虫類に逃げられる冬」を、「冬よ／僕に來い、僕に來い」と、真っ正面から

受け止めようとする決意を示す。『道程』において、「僕」が使われるのはこれが最初である。以後、「冬の詩」「僕等」に用いられる。関良一氏は、「僕」について、「幕末の漢学書生の間から起ってしだいに広く行われるようになった一人称用語。もちろん本来は下僕の意の謙称。書生ことばで、口語的なくだけた語感の語である。」（『近代文学注釈大系 近代詩』、有精堂、昭和38・9）と説明している。

「僕は冬の力、冬は僕の餌食だ」は「倒錯した表現」（『近代詩集の探究』）のようにも思えるが、関良一氏は、「弱者たちがいわば冬の『餌食』であるのに対している。」（同前）と読み取っている。「僕は冬の力」は、僕は冬の力そのもの、冬の力の体現者であり、冬のエネルギーを取り込み、自分のエネルギーにする、という程の意味であろう。冬という季節との一体化であり、前出の「人に」（大正2・2）によれば、光太郎にとって「生」＝「力」、「力」＝「生」であるから、冬という季節を通して、光太郎の生と自然との一体化の表現でもある。

第四連。「火事を出せ、雪で埋めろ」の「火事」は、俗に、「火事と喧嘩は江戸の華」といわれた火事である。別に、火事を歓迎しているわけではなく、「冬」という季節の華やぎとして、「火事」と「雪」とを取り上げているわけである。光太郎の冬を喜ぶ感情の表現である。「刃物のやうな」という比喩は、二行前の「しみ透れ、つきぬけ」に対応して、冬の浸透力、鋭さを言ったもの。

以上のように、「冬が来た」は、刃物のように鋭く、底知れぬ力を潜めた冬という季節に、自己の内面と直接に響き合うものを認めて、その季節の到来に歓喜する心情をうたったものである。「新しい生」を得た光太郎の、その「生」の方向性を示すにふさわしい第一声である。なお、光太郎の冬という季節への共感を語るものとしては、「冬が来る」の項に引用した「満目蕭条の美」がある。

冬の詩

一

冬だ冬だ、何処もかも冬だ
見わたすかぎり冬だ
再び僕に会ひに来た硬骨な冬
冬よ、冬よ
躍れ、叫べ、僕の手を握れ
大きな公孫樹の木を丸坊主にした冬
さらさらと星の頭を削り出した冬
秩父、箱根、それよりもでかい富士山を張り飛ばして来た冬
そして、関八州の野や山にひゅうひゅうと笛をならして騒ぎ廻る

冬

貧血な神経衰弱の青年や
鼠賊のやうな小悪に智恵を絞る中年者や
温気にはびこる蘚苔のやうな雑輩や
おいぼれ共や
情弱で見栄坊な令嬢たちや
甘つたるい恋人や
陰險な奥様や
皆ひとちぢみにちぢみあがらして
素手で大道を歩いて来た冬
葱の畠に粉をふかせ
青物市場に菜つばの山をつみ上げる冬
万物に生をさけび
人間の本心をゆすぶり返し
惨酷で、不公平で

憐憫を輕蔑し、感情の根を洗ひ出し
隅から隅へ畏れを配り

弱者をますます弱者にし、又殺戮し

獐猛な人間に良心をよびさまし

前進を強ひて朗らかな喇叭を吹き

気まぐれな生育を制へて痛苦と豊饒とを与へる冬

冬は見上げた僕の友だ

僕の体力は冬と同盟して歡喜の声をあげる

冬よ、冬よ

躍れ、さけべ、腕を組まう

二

冬だ、冬だ何処もかも冬だ

都会のまんなかも冬だ

銀座通も冬だ

勇敢な電車の運転手、よく働く新聞の売り、誠実な交番の巡查、

体力を尽す人力車夫

冬は汝に健康をおくる

大時計の鐘も空へひびいて鳴りわたり

寶石は鋭くひかり

毛布、手袋、シャツ、帽子、ボア、マッフ、外套、毛皮は人間の

調節性を語り

葉巻紙巻の高価な烟草、ボムペイヤ、シクラメン、カシミヤ、ペ

ロキシイド、香水、サボン、クリイム、白粉は、人間の贅沢と

楽欲との自然性を賛美する

ラヂウム、エマナトリウムに冬は人間の滑稽な誇大癖を笑ひ

湯気の出てるカフエの飾菓子に冬は無邪気な食欲をそそる

女よ、カフエの女よ

強かれ、冬のやうに強かれ

もろい汝の体を滑稽な遊治郎の手に投ずるな

汝の本能を尊び

女らしさと、屈従を意味する愛嬌と、わけもない笑と、無駄なサ

ンチマンタリズムとを根こぎにしろ

そして、まめに動け、本気にかせげ、愛を知れ、すますな、かが

やけ

冬のやうに無惨であれ、本当であれ

白いエプロンをかけ、鉛筆をぶらさげたカフエの女よ

けなげな愛す可き働き人よ

冬は汝に堅忍をあたへる

冬は又、銀行の事務員、新聞社の探訪、保険会社の勧誘員を驚か

し

冬は自働車のひびきを喜び

停車場構内の雑踏と秩序とを莊重に彩り

時のきびしさを衆人に迫る

冬よ、冬よ

躍れ、叫べ、足をそろへろ

三

冬だ、冬だ、何処もかも冬だ

大川端も冬だ

永代の橋下にかかつて赤い水線を出してゐる廻運丸よ

大胆な三百噸の航海者よ

海の高い、波に白手拭のひるがへる、鷗の啼いて喜ぶ冬だ

汝の力を果す時だ、汝の元気の役立つ時だ

さうだ、さうだ、鯨のうなる様な汽笛をならせ

牆に綱を張れ、旗を上げろ、黒い烟を吐け

猶予するな、出る、出る

あの大きい、乗りごたへのある大洋へ出る

汽罐を鳴りひびかせろ

働いてほてつた体に雲を浴びろ

ああ、数限りのない小舟の群よ

動け、走れ、縦横自在にこぎ廻れ

帆かけ船は帆をかける

にたりは艀へそに水をくれろ

水に凍えたまつ赤な手足をふり動かせ

忠実な一銭蒸気は、我もの顔に大川を歩け

冬は並び立つ倉庫に乾燥をめぐみ

高い煙突の煤烟を遠く吹き消し

大きな円屋根を光らし

川べりの茶屋小屋を威嚇し

吾妻橋の人込みに歓喜する

土工よ、人足よ、職工よ

汗水を流して、大地に仕事をし、家を建て、機械を動かす天晴の

勇者よ

汝の力をふりしほれ、汝の仕事を信仰しろ、汝の暴威をたけらせ

ろ

泣く時は泣け怒る時は怒れ、わめく時はわめけ

やけになるな、小理屈をいふな

冬のやうにびしびしとやれ

背骨で重い荷をかつげ

大きな白い息を吹け

ああ、かはいらしい労働者よ

冬はあくまで汝の味方だ

骨身を惜しまず正義を尽せ

冬よ、冬よ

躍れ、叫べ、足を出せ

四

冬だ、冬だ、何処もかも冬だ

高台も冬だ

馬車馬のやうに勉強する学生よ

がむしやうに学問と角力をとれ

負けるな、どんどんと卒業しろ

インキ壺をぶらさげ小倉の袴をはいた若者よ

めそめそした青年の憂鬱病にとりつかれるな

手淫常習患者になるな

胸を張らし、大地をふみつけて歩け

大地の力を体感しろ

汝の全身を波だたせろ

つきぬけ、やり通せ

何を措いても生を得よ、たつた一つの生を得よ

他人よりも自分だ、社会よりも自己だ、外よりも内だ

それを攻めろそして信じ切れ

孤独に深入りせよ

自然を忘れるな自然をたのめ

自然に根ざした孤独は、とりもなほさず万人に通ずる道だ

孤独を忘れるな、万人にわからせようとするとするな、第二義に生きる

な

根のない感激に耽る事を止めよ

素より衆人の口を無視しろ

比較を好む評判記をわらへ

ああ、そして人間を感じろ

愛に生きよ、愛に育て

冬の峻烈の愛を思へ、裸の愛を見よ

平和のみ愛の相すがたではない

平和と慰安とは卑屈者の糧だ

ほろりとするのを人間味と考へるな

それは循俗味だ

氷のやうに意力のはちきる自然さを味へ

いい世界を作れ

人間を押し上げろ

未来を生かせ

人類のまだ若い事を知れ

ああ、風に吹かれる小学の生徒よ

伸びよ、育てよ

魂をきたへろ肉をきたへろ

冬の寒さに肌をさらせ

冬は未来を包み、未来をはぐくむ

冬よ、冬よ

躍れ、叫べとどろかせ

五

冬だ、冬だ、何処もかも冬だ

見渡すかぎり冬だ

その中を僕はゆく

たった一人で――

(十二月六日)

「創作」大正三年三月号に発表。初出の題名は「冬」。末尾に「――
「道程」より――」の付記があり、詩集『道程』の計画が始められた
ことがわかる。また、各連の間は一行あきであったが、一〇五の数字

が入れた。

第一章は、冬の訪れを受けて、冬の威力を称えた、冬の総論とでも
言うべきもの。「再び僕に会ひに来た硬骨な冬」は、冬の人格化。「硬
骨」は意志が強く、他に屈しないこと。「大きな公孫樹を丸坊主にし
た冬」は、「冬が来た」の「公孫樹の木も葎になつた」を冬を主体に
表現したもの。「きらきらと星の頭を削り出した冬」は、大気が澄ん
で、星の輝きが鋭くなった様子を、同様に、冬を主体に表現したもの。
「秩父」は、東京、埼玉、群馬、山梨、長野の県境にまたがる山地。
「箱根」は、神奈川、静岡の両県にまたがる死火山。富士火山帯に属
す。「張り飛ばして来た冬」は、冬が烈風、つまり木枯しとともにやっ
て来たことの表現。「関八州」は、関東八州の略。相模、武蔵、安房、
上総、下総、常陸、上野、下野の八カ国。現在の東京、神奈川、埼玉、
千葉、群馬、栃木、茨城の都六県に当たる。つまり、関東一円に冬
が訪れたことの表現である。「ひゆうひゆうと笛をならして騒ぎ廻る」
は、風邪の激しさの表現。「大きな公孫樹の木を……騒ぎ廻る冬」の
四行は、冬を北風中心にとらえ、その威力を表現したもの。以上は、
冬の威力を直截に表現したもの。

「鼠賊」は、小盗人、小賊。「温気」は蒸し暑いこと、「藓苔のやう
な」は、陰湿なやうすの例え、「雑輩」はつまらない奴等。「おいぼれ」
は、年老いて頭やからだの働きの鈍くなった人を軽蔑している。「懦
弱」は、怠けて弱いこと、意気地のないこと。「貧血な神経衰弱の青
年」から「陰險な奥様」までは、「冬が来た」に「人にいやがられる
冬」とあった、その「人」、つまり「弱者」を列挙したもの。「ちぢみ
あがらして」は、この場合は寒さによって、からだがすくむこと。
「素手で大道を歩いて来た冬」の「素手」は、手に何も持たないこと、
特に、刃物を持たないこと。つまり、前掲の「弱者」たちを「素手」
で「ちぢみあがらして」、ということであるが、前出の「夜」にうた
われている、十月末の寒い風が吹く夜、「木綿の単衣」で、というこ
とは、つまり素足で「東京の街道を歩き廻る」光太郎の姿が連想され

る。「葱の畠に粉をふかせ」は、「葱」の青い筒型中空の葉の部分が高く粉を噴くことを言ったもの。「青物市場に菜つばの山をつみ上げる」は、冬は白菜、小松菜などを初めとして、いわゆる冬菜の季節であること。「大道」から「葱の畠」「青物市場」と連想が働いている。以上は、冬の威力の働きを、人間界、自然界に即して、具体的に述べたものの。

「万物に生をさげび」は、万物に生の本質を知らしめ。「人間の本心をゆすぶり返し」は、虚飾を吹き払って、である。「惨酷で、不公平で」と言う。これを承認し、肯定するところに、生力という光太郎の認識、また自身を強者の立場にありとする自己認識が見られる。次行の「憐憫を軽蔑し」も同じである。「感情の根を洗ひ出し」は、喜怒哀楽や好悪などの状況や対象に対する判断の根拠を確認すること。

「隅から隅へ畏れを配り」の「畏れ」は、(自然に対する)畏敬の念である。「獐猛」は、性質が荒くただけしいこと。「獐猛な人間」については、「夏の夜の食欲」に、「私の魂はこの時、四足獣のむかしを忍び／曾て野にさまよつて餌を求つた習性を懐かしみ／又、闇黒の喜びにふるへ／秘密、疾走、破壊、飽満の欲に飢え渴く」といい、「夜」に「人間より今少し恐ろしくて正直なものが欲しい」といった、人間の内部に奥深くひそむ、原始性、獣性を自然性につらなるものとして、積極的に肯定した句が思い浮かぶ。そのような人間が良心を呼び覚まされた時、光太郎の理想とする人間像が立ち上がるのである。「朗らかな喇叭」は、いわゆる進軍喇叭のごときもの。精神を鼓舞し、激励するもの。「痛苦と豊饒とを与へる」は、まず、厳しさによって、「気まぐれな成育を制へ」、その「痛苦」に耐えたところに、真の「豊饒」、豊かな実りを与える、というのである。「見上げた」は、すぐれた。「僕の体力は冬と同盟して歓喜の声をあげる」については、「冬が来た」に、「僕は冬の力、冬は僕の餌食だ」とあった。

第二章は、「都会のまんなか」、「銀座通」の冬をうたっている。「勇敢な電車の運転手、よく働く新聞の売り、誠実な交番の巡査、体力を

尽す人力車夫」は、銀座通りに見掛ける労働者を列挙したもの。「冬は汝に健康をおくる」は、彼等への共感を表現したものの。「大時計」は、明治の新文明のシンボルの一つであり、時計塔は、当時、銀座、京橋周辺に六つあったという。ここは、銀座四丁目の服部時計店の大時計であろう。「寶石は鋭くひかり」は、美しいものを身につけることは、人間の自然な欲求であるとして、肯定されていることを示す。同じように、「毛布」以下「毛皮」にいたるまでの品々は、余計なものではなく、「人間の調節性」を示すものとして、肯定される。「ボア」(Boa) (英)は毛皮の襟巻。「マッフ」(Muff) (英)は女性が手を入れて暖める円筒状の毛皮。さらに、「葉巻紙巻の高価な烟草」から「白粉」までは、「人間の贅沢と楽欲との自然性を讚美する」ものとして肯定される。「楽欲」は欲望。「ボムペイヤ」は未詳。「ペロキシイド」は Peroxide (英)か。過酸化水素水のこと、殺菌、髪の毛の漂白に用いられる。「カシミヤ」(Cashmere) (英)はインドのカシミア地方産の山羊の毛で織った毛織物。柔らかくて、保温性がよく、最高級の織物とされる。「サボン」(Sapao) (ポルトガル)は石鹼。以上に列挙された品々は、光太郎なら、虚飾の一語を以て否定してしまいたいようなものばかりであるが、光太郎は、それらを全て肯定するのである。それらを求めるのは、人間性の自然である、というわけである。

「ラヂウム、エマナトリウムに冬は人間の滑稽な誇大癖を笑ひ」の「ラヂウム、エマナトリウム」Radium Emanatorium はラドン吸入室と訳す。ラヂウムは放射性同位元素であり、自然に崩壊して気体元素であるラドンを生じる。このため、現在はいいられていないラドンの別名にラヂウム エマナチオンがあった。ラヂウム、エマナトリウムはこの呼び名による。ラドンは健康によいと信じられ、このような施設が作られたが、今日では、このような放射性同位元素は、少量でも健康に有害であると考えられ、このような治療施設はない。「飾菓子」は、本来は冠婚葬祭などの儀式用の菓子。運平糖、有平糖などで、四季の草花、果実、魚介の形に、美術的に細工したもの。ここでは、

カフェの飾り窓（ウィンドウ）に見本として飾られているケーキの類いであろう。

「銀座通」を代表させて、光太郎が取り上げるのは、「カフェの女」である。「遊治郎」は、酒色にふけり身持ちの悪い男。放蕩者。道楽者。「もうい汝の体を滑稽な遊治郎の手に投ずるな」は、いわゆる遊び人の安っぽい誘惑に身をゆだねるな、ということ。「汝の本能を尊び」は、心のままに振る舞え、ということ、自然性の尊重である。

「女女しさ」と、屈従を意味する愛嬌と、わけもない笑と、無駄なサンチマンタリズムと」は、いわゆる女性らしさとされるものであるが、それらを後天的なもの、社会（世間）の要求によるものと把握しているのである。「女女しさ」は、柔弱で、意気地がなく、未練がましいようす。主体性を持ってないからこうなるのである。「愛嬌」それ自体は否定しないが、（男に）屈従しての愛嬌は否定される。「わけもない笑」は、「屈従を意味する愛嬌」の一つである。「サンチマンタリズム」は、感情に溺れる態度。光太郎は、それらを「根こぎにしろ」、つまり根底からとり除けというのである。そして、「まめに動け、本気にかせげ、愛を知れ、すますな、かがやけ」というのである。「まめに」は苦勞をいとわず、よく勤めて。「すます」は気取る。体裁を飾る。虚飾の一種であり自然に反するから否定される。「冬のやうに無惨であれ、本当であれ」については、第一章の最後の部分に、冬の特質の一つとして、「惨酷で、不公平で」とあった。「無惨」は惨酷なこと。自然であることは、時に惨酷であることにつながる。「本当であれ」は、真実であること、あるべき姿であること。「けなげな愛す可き働き人」である「カフェの女」に、冬のように、強く真実であることをもとめた光太郎は、「冬は汝に堅忍をあたへる」と保証する。「堅忍」はがまんづよさ。次の、「銀行の事務員、新聞社の探訪、保険会社の勧誘員」は、銀座通でよく見掛ける職種の人々であらう。「探訪」は、社会の出来事や事件の真相を探りに出向くことであるが、ここでは、「探訪記者」のこと。彼らも冬をおそれぬ「愛す可き働き人」の仲間

である。「自働車のひびき」は、社会の活力、エネルギーの表れである。冬は「停車場構内の雑踏と秩序とを莊重に彩り／時のきびしさを衆人に迫る」は、鉄道の駅の構内の、雑踏（人ごみ）は雑踏として、列車の進行などの秩序は秩序として、おごそかに取り仕切り、「時のきびしさ」を多くの人々に痛切に感じせしめる、というのである。「冬」と「時」とが、その「きびしさ」において、共通点を見いだされているのである。

第三章は、隅田川のほとりの「大川端」に舞台は移る。「大川端」は隅田川の下流、吾妻橋から河口付近までの右岸一帯の呼び名。ここでは、下町を代表させる意味があるであらう。「大川端」という呼び名には、情緒纏綿たるものがあるが、先ず最初に呼び出されたのは、「大胆な三百噸の航海者」「廻運丸」である。廻運丸は、「永代の橋下にかかつてあかい水線を出して居る」。「永代の橋」は永代橋。隅田川の下流にかかる橋。「水線」は喫水線（吃水線）のこと。「海の高い、波に白手拭のひるがへる、鷗の啼いて喜ぶ冬だ」は、冬の海の魅力的な表情を、簡潔に表現している。「波に白手拭のひるがへる」は、白波の立っているようす。「鷗」は、夏、カムチャッカ、シベリア、カナダなどの北の地方の海岸に繁殖、冬、日本に現れ全国の海上に群棲する。鷗の仲間の「うみねこ」は夏、冬とも日本付近にとどまっている。「汝の力を果す時だ、汝の元気の役立つ時だ」の「汝」は廻運丸以下、「働いてほてつた体に雲を浴びろ」まで、廻運丸の活発な動きを、「……せよ」という命令形を通して、ダイナミックに表現している。そのリズムは、「数限りのない小舟の群」「帆かけ船」「にたり」「一銭蒸気」と列挙しながら、続いてゆく。中で「水に凍えたまつ赤な手足をふりうごかせ」の一行は、小舟の船頭の姿をうたった。「にたり」は荷足。荷足船の略。和船の一種。多く関東で用いた小形の荷船。船の幅が広く、河川の運送や渡し船に使われた。「艀べそ」は、船の尾端につけた小突起。艀の穴にはめて、艀を受けるもの。「一銭蒸気」は隅田川にあった小型客船。初め一区間の乗船料が一銭であっ

たためこの名があり、料金改定後もこの名が残った。「大川」は隅田川の吾妻橋付近から下流の異称。「一銭蒸気は……歩け」は、一銭蒸気が、隅田川周辺の住人にとって自分の足のように親しい乗り物であったことによる。ところで、「廻運丸」は実在の船の名称と思われるが未詳。『東京風俗志』中巻の「舟車」の項の各種の船の説明図の中に、名前の似たものとして「通運丸」があるが、川蒸気船、つまり、通航船であり、これは「大川筋に往返」するもので、海洋には出ない。「通運丸」は内国運送（現、日本通運）の船籍で、後に両国から銚子に行く航路が出来たが、これも江戸川を上るのである。いずれにしても、「廻運丸」の名は見当たらない。

「冬は並び立つ倉庫に乾燥をめぐみ」から「吾妻橋の人込みに歓喜する」までは、隅田川のほとりの風景。「大きな円屋根」は、明治四十二年、日本相撲協会により、東京両国に開設された国技館のドーム形の屋根根であろう。建築家辰野金吾の設計による。大正六年、失火により全焼した。「茶屋小屋」は、客に酒色の遊興をさせることを営業とする店。引手茶屋、遊郭の類。「茶屋小屋」を冬が「威嚇」するのは、遊墮な場所だからである。次の「吾妻橋の人込みに歓喜する」と対になっている。「吾妻橋」は、東京都台東区浅草と墨田区本所とをむすぶ、隅田川の橋。

次に登場するのは、「土工」「人足」「職工」といった労働者である。これらの肉体労働者を、「天晴の勇者」と呼び、また、「かはいらしい労働者」ともいうのである。「かはいらしい」は、愛すべき意であろう。この句は、第二章の「カフエの女」を「けなげな愛す可き働き人」と呼んだ句に対応する。そして、「汝の力をふりしほれ、汝の仕事を信仰しろ、汝の暴威をたけらせろ」「冬のやうにびしびしとやれ」とよびかける。「信仰しろ」は、信じて尊べの意。「暴威をたけらせろ」は、乱暴な行動をけしかけているのではなく、光太郎の「力」への信頼を基盤にした、勇ましく強くあれ、という呼び掛けであろう。そして、「骨身を惜まず正義を尽せ」と、労働者に、冬の「正義」の遂行

者を見る。「骨身を惜まず」は、苦勞をいとわないで。

第四章。舞台は、隅田川のほとりの低地から、一転して「高台」に移る。「高台」は、この場合、東京の山の手を言う。東京の山の手は、幾分高台になって、住宅地の多い、本郷、小石川、牛込、四谷などを中心とする文京区、新宿区あたりをいう。大学も多く、学生のための下宿も多かった。そこで、「馬車馬のやうに勉強する学生」が取り上げられることになる。「馬車馬のやうに」は、脇目もふらずに物事に集中することのたとえ。「がむしやらに」はむちゃくちゃに。「学問と角力をとれ」は、学問と取り組め。「小倉の袴」は小倉織の袴のことで、当時の学生風俗の一つ。小倉織は北九州の小倉地方で産する綿織物。「手淫常習患者」のルビの「マニニアリスト」は「マニユアリスト」manuallistの誤植。手淫は自然に反する行為である。「馬車馬のやうに」から「手淫常習患者となるな」、あるいは次行の「胸を張らし、大地をふみつけて歩け」までは、直接、学生に呼びかけたものといえるが、続く、「大地の力を体感しろ」以下、「人類のまだ若い事を知れ」までの二十五行は、詩の流れからいえば、もちろん、学生に呼びかけていることになるが、その内容は、自分自身へのものとも、未来への可能性を多く持った存在としての学生を含む、青年全般への呼びかけとも取れるものである。

まず、第一に取り上げられるのは、「つきぬけ、やり通せ／何を措いても生を得よ、たつた一つの生を得よ／他人よりも自分だ、社会よりも自己だ、外よりも内だ／それを攻めろそして信じ切れ／孤独に深入りせよ」という、「個への沈潜」(『近代詩集の探究』)である。「きりきりともみ込む」「しみ透れ、つきぬけ」(『冬が来た』)という冬の浸透力は、ここでは、「つきぬけ、やり通せ」という、貫徹力として表現される。前日(十二月五日)の「よろこびを告ぐ」において、「私の生」を得たという確信を、バーナード・リーチに高らかに告げた光太郎は、「たつた一つの生を得」、「それ」(生)を「攻めろ」(追及しろ)と要求する。それが、「孤独に深入り」することになるのは、

「さびしきみち」以来、すでに繰り返し語られた、光太郎の論理である。しかし、ここには、「さびしきみち」の、「さびしきはひとのよのことにして／かなしきはたましひのふるさと」とうたう弱々しさはない。「さびしきみち」の孤独は、「人類の泉」において、「私は自分のゆく道の開拓者」であるゆえの孤独であると、その認識を深めながら、まだ、「私は人から離れて孤独になりながら／あなたを通じて再び人類の生きた氣息に接します」という、例え、それが、智恵子への愛を告げるものであっても、孤独に徹し切れない一面をうかがわせるところがあつた。しかし今、光太郎は、確信をもって、「孤独に深入りせよ」というのである、それは、光太郎が、「僕の体力は冬と同盟して、歓喜の声をあげる」(第一章)というような、冬との一体感を通して、自然との一体感を確実なものにし得たからである。「孤独に深入りせよ／自然を忘れるな自然をたのめ／自然に根ざした孤独は、とりもなほさず万人に通ずる道だ／孤独を忘れるな、万人にわからせようとするな／第二義に生きるな」。「万人」は、「―」においては、「あなたはその身を売るんです／一人の世界から／万人の世界へ」と否定的に使われ、「人類の泉」では、「私は今生きている社会で／もう万人の通る道路から数歩自分の道に踏み込みました」と、社会一般の人々の意に用いられているが、ここでは、まず、「自然に根ざした孤独は、とりもなほさず万人に通ずる道だ」と、自然を仲立ちにして、「孤独」と「万人」とを結合させている。この「万人」は、人類の意であろう。この結合が可能なのは、冬の厳しさを通して、「けなげな愛す可き働き人」である「カフエの女」(第二章)や、「かはいらしい労働者」である土工、人足、職工らとの間にうまれた連帯意識によるものであろう。そして、次の、「万人にわからせようとするな」の「万人」は、社会一般の人々であろう。「第二義に生きるな」は、とりもなおさず、「第一義に生きよ」の意で、もっとも重要な根本の意義を目指して生きよ、ということ。「根のない感激」は、「無駄なサンチマンタリズム」(第二章)に通ずる。「素より衆人の口を無視しろ」は、「衆人」(多く

の人)は、「ありとある雑言を唄つて閑な時間をつぶそうとする」(「或る宵」)だけであるから。「愛に生きよ、愛に育て／冬の峻烈の愛を思へ、裸の愛を見よ／平和のみ愛の相ではない／平和と慰安とは卑屈者の糧だ」と、光太郎は、愛にも激しいものを求めるのである。「ほろりとするのを人間味と考へるな／それは循俗味だ／氷のやうに意力のはちきる自然さを味へ」と、いわゆる人情味も否定される。「循俗味」は、世俗に従う態度。そして、最後に、人類の未来に思いをやるのである。「人類のまだ若い事を知れ」と、人類が、まだまだ大きな可能性を内蔵していることを指摘し、「風に吹かれる小学の生徒」に、「伸びよ、育てよ」と呼びかけ、「冬は未来を包み、未来をはぐくむ」と断定する。「包み」は内包する、ふくむの意。

第五章。こうして光太郎は、「冬だ、冬だ、何処もかも冬だ／見渡すかぎり冬だ／その中を僕はゆく／たつた一人で――」と、冬のきびしさを通して、そこに自然との一体感を体感しながら、「自然に根ざした孤独は、とりもなほさず万人に通ずる道」であることを確信して、一人進んでゆくという決意を表明するのである。

「よろこびを告ぐ」において、「新しき生」を得たという確信をうたった光太郎は、その同じ日に「冬が来た」、その翌日に「冬の詩」を書き、「新しき生」の向かう方向を明確に示して見せたのである。